《論　説》

明治中期における東北地方からの伊勢参宮

――明治二十九年『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』の分析から――

谷　釜　尋　徳

一、はじめに

新暦の明治二十九（一八九六）年一月十七日、十名の男性が岩手県の花巻を旅立った。五七日間におよぶ日本周遊旅行のはじまりである。十名のうちの一人、菅原豊治という人物が旅の詳細を日記に書き留めていた。『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』[1]（以下『道中記』と略称）と命名されたこの史料には、文字通り三重県の伊勢神宮、四国は香川県の金毘羅神社への参詣に加えて西国三十三所順礼が組み込まれた旅の一部始終が刻銘に描写されている。

この旅が行われた明治二十年代は、東海道線や東北線の全線開通をはじめ日本国内の鉄道網が充実してきた時期である。こうした時勢にあって、菅原豊治一行は汽車移動と徒歩の移動を組み合わせた近代的な旅を敢行する反面、目的地やルートは近世的な旅の世界を忠実に再現している点は興味深い。『道中記』は、日本の庶民層の旅が、移動手段の発達を背景に大きく変化していく過渡期の一断面を切り取った稀有な記録であるといってよい。

近代に至ると日本人の旅は質的に大きく変化したと考えられている。明治二十二（一八八九）年の東海道線全通に象徴される鉄道の普及によって、従来の徒歩による旅は次第に姿を消し、旅のスピード化の時代が到来した。ところが、鉄道が普及を見せつつも徒歩旅行の伝統が生き残っていた過渡期の旅の事情は意外と知られていない。この時期の旅の事情を取り上げた研究はあるものの[2]、当時の旅の様子を刻銘に記録した旅日記そのものが十分に残されているわけではない[3]。したがって、明治二十九（一八九六）年における東北地方からの伊勢参宮の一部始終が収められた『道中記』は、貴重な史料であるといえよう。

以上より本稿では、『道中記』の分析を通して、一般庶民の伊勢参宮の旅が近世的なものから近代的なものに変質していく過渡期の事情を垣間見ることにしたい。

二、史料について

①　史料の概要

『道中記』は、筆者が東京都内の古書店を通して原物を入手したもので、縦一二cm×横一七cmの横半帳の古文書である。表紙には「明治廿九年　伊勢参宮　四国礼拝　西国順礼道中記　旧三月廿一日出立」と墨書きされ（図1参照）、裏表紙には「岩手縣平氏　菅原豊治」と日記の著者名が記されている。「三月廿一日出立」とあるが、この日付は新暦・旧暦いずれの出立日にも帰着日にも該当しない。誤記であろうか。右端の「岩手花巻より」との薄い鉛筆書きは、どのタイミングで書き込まれたものなのか判然としない。中身は計四九丁の縦書き仕様で、虫損箇所は少なく概ね文字を判読することができ、保存状態は良好である。また、文中に「当時普請中[4]」とか「当時ハ[5]」といった文言が散見されることから、旅から帰った後に改めて清書された可能性が高い。

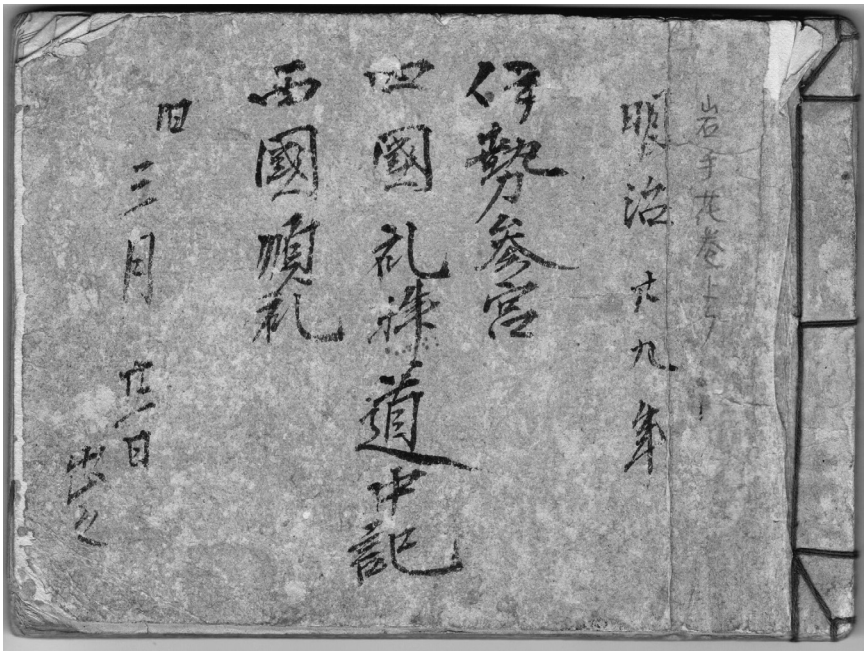

図１　『道中記』の表紙

菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』1896年より。

新暦の明治二十九（一八八九）年一月十七日の出立から三月十三日の帰着まで、毎日の行動が詳細に記録されている。所々、宿場の出立および到着や汽車の乗車について時刻が記載されているが、「〇時〇分」という表記になっていて、この時代には定時法が浸透していた様子がうかがえる。

史料の著者、菅原豊治については、岩手県花巻に居住していたということ以外の人物像は不明である。『道中記』の末尾には「〆拾人」[6]と記され、十名の氏名が列記されている。著者と同じ菅原姓の人物は二名、小原姓が三名、渡邊姓が二名、清水姓が三名で、居住地を同じくする血縁関係のあるグループが複数寄り集まって同行者が構成されていたものと類推される。

史料の中身については、巻末の翻刻を参照されたい。

② 旅のルート

『道中記』の旅のルートを地図上に復元したものが図2である。汽車を巧みに利用して東海地方まで移動し、伊勢参宮を達成した後は、近畿や四国、中国地方まで足を延ばしていることがわかる。帰りは中山道で長野まで至り、汽車で東北線を北上して花巻に戻った。実は、このルートは、近世に東北地方から伊勢参宮をした庶民のルートと重なる部分が多い。

近世の東北地方からの伊勢参宮ルートは、大別すれば三類型である。[7] 一つは、「近畿周回型」である。在地から奥州道中に合流し、途中日光に参詣して江戸へ下る。そこから主に東海道と伊勢参宮道経由で伊勢参宮を果たした後は、熊野、高野山、奈良、大阪、京都などといった近畿の名立たる観光地を周回した。以降は、中山道を経て善光寺に至り、さらに新潟方面に進んで日本海沿岸を北上して東北に帰着する。

もう一つは「四国延長型」である。在地出立後、近畿の観光地を周回するまでは近畿周回型とほぼ同様のルートを歩くが、大阪からは船で海上を移動し四国の丸亀まで足を延ばす。原則として四国を周遊することはなく、金毘羅神社への参詣後は直ちに船で中国地方（岡山）に上陸し、山陽道で京都付近まで戻った後は、再び近畿周回型と概ね重なるルートで日本海側に出て北上して東北へ戻る。

三つ目は、「富士登山セット型」である。全体像としては近畿周回型と四国延長型のルートで旅をするが、江戸から東海道経由で西に向かう途中、主要幹線を一旦外れて富士登山を敢行し、その後再び沼津付近から東海道に合流して伊勢参宮の旅を続ける。

『道中記』の旅のルートは、上記の三類型のうち「四国延長型」に類似している。ただし、帰路に長野の善光寺に詣でた後、日本海側には抜けずに群馬、栃木方面を経て往路と同じルートで帰着している点が異なる。これは、

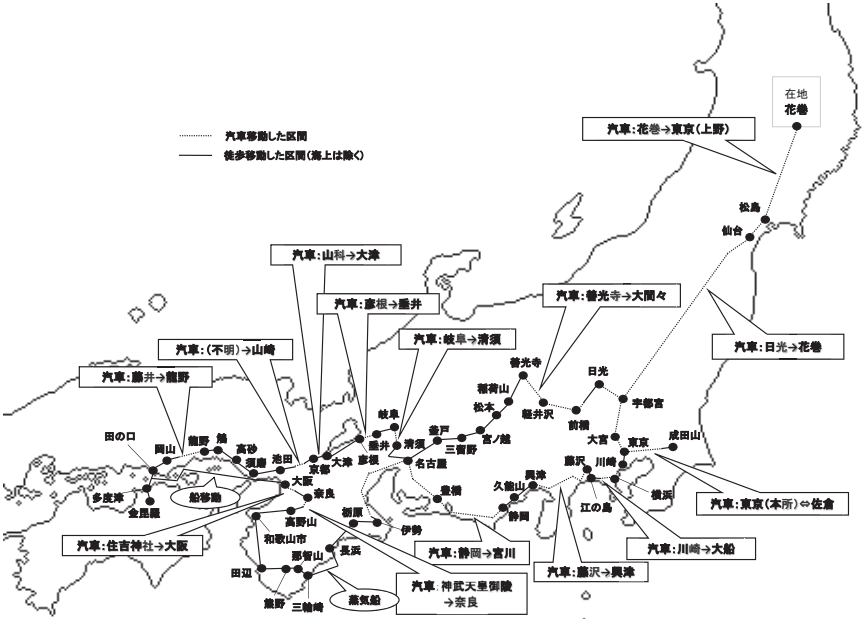

図２　『道中記』の旅のルート

菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』1896年より。

当時、日本海沿岸を北上するルートにはいまだ鉄道が敷設されていなかったことと関係しているのかもしれない。

山本は、千葉県柏からの明治二十七（一八九四）年の伊勢参宮を引き合いに出して、「鉄道が中心となった旅というより、近世の旅の中に鉄道が入り込んだと表現したほうがよいであろう。」[8]と指摘する。『道中記』の旅も、漏れなくこの傾向に含み入れてよかろう。

③　旅の期間と季節

『道中記』は五七日間の旅であった。今日的な感覚では、五〇日を超える旅は大旅行の部類に入るが、明治期の伊勢参宮としてはさほど目を見張る日数ではない。そこで、近世においてほぼ同様のルートを辿った、一連の東北地方からの伊勢参宮と比べてみたい。表１は、近世後期における東北地方からの伊勢参宮の旅日記の

表１　近世後期における東北地方からの伊勢参宮の日数

表題	年代	旅の時期（旧暦）	総日数
西国道中記	1783	2. 6～6. 27	142
伊勢参宮道中記	1786	2. 4～6. 17	124
伊勢参宮所々名所並道法道中記	1794	1. 16～4. 16	90
道中記	1799	6. 27～9. 21	77
遠州秋葉・伊勢参宮道中記	1805	11. 11～1. 11	60
御伊勢参宮道中記	1805	1. 10～3. 18	67
道中記	1814	（不明）	86
伊勢参宮西国道中記	1818	10. 21～1. 25	93
伊勢参宮旅日記	1823	1. 6～4. 3	86
伊勢道中記	1826	1. 14～4. 15	92
（表題不明）	1830	1. 9～閏3. 8	86
（表題不明）	1831	（不明）	66
万字覚帳	1835	2. 5～5. 2	75
道中日記	1836	1. 26～4. 29	90
伊勢参宮道中日記帳	1841	1. 5～3. 10	96
西国道中記	1841	12. 11～2. 8	85
道中記	1849	1. 26～4. 29	79
（表題不明）	1849	10. 15～1. 9	83
道中日記帳	1856	2. 1～4. 17	73
道中記	1857	1. 25～5. 15	109
伊勢参宮并熊野三社廻り金毘羅参詣 道中道法附	1859	2. 9～5. 29	104

谷釜尋徳「近世における東北地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離―旅日記（1691～1866年）の分析を通して―」『スポーツ健康科学紀要』12号、2015年、32～33頁より。

うち、本稿が扱う『道中記』と近い「四国延長型」のルートを示すものを抽出し、一覧表にしたものである。ここで確認できる範囲においては、最短でも六〇日間、最多では一四二日間、平均的に見ると八〇日間程度をかけて旅をしていたことがわかる。これが徒歩移動を主とする時代の実情である。一方、『道中記』の旅は五七日間であることを考えると、汽車をはじめとする交通手段の発達が旅のスピード化を招来したといえよう。

次に、『道中記』の旅が行われた季節に着目したい。表１の「旅の時期」の欄を見ると、近世後期における東北地方からの伊勢参宮の旅は、概ね農繁期にかからない冬の農閑期が中心的に選び取られていたことがわかる。これは東北地方のみならず、近世の伊勢参宮においては全国的に見られた傾向であった。(9)『道中記』の旅の時期は、旧暦に読み替えると十二月九日から二月一日である。菅原豊治ら十名が農業従事者であったか否かは把握できていないが、近世的な旅の形式を踏襲していたと考えることができよう。

三、道中の行程

ここでは、旅日記の著者の菅原豊治をはじめとする十名の旅人がどのような行程で旅をしたのか、その概要を時系列でたどることにしたい。

①　花巻〜東京

明治二十九（一八九六）年一月十七日（史料には旧暦と新暦の日付が併記されているが、以下新暦で表記）、菅原豊治を含む同行者十名が岩手県花巻の大神宮に集い、西へ向かって出発した。花巻の停車場から汽車に乗って松島に到着すると、松島を遊覧して塩竈神社にも参詣する。その後、再び汽車に乗り込み東北最大の都市仙台に至

る。仙台市内の紡績工場、警察署、県庁、学校などを見物した。翌日、仙台発の汽車で東京に向い、二〇時に上野に到着し駅前に宿泊する。

②　東京〜伊勢

翌日から三日間、東京見物がはじまる。一月二十日、浅草観音に詣で、次いで当時としては珍しい一二階建ての凌雲閣に登った菅原豊治は「絶頭に登レバ遠望鏡アリ 見料一銭ヲ出 四方の眺望スレバ 市内眼下ニ物体利然近ク見風雅宜シ」[10]との感想を書き残した。その日は東本願寺に参詣し、馬喰町に宿を取る。一月二十一日、日記では九段の東京招魂社（後の靖国神社）の存在に触れながらも「我ハ参ラズ遺憾ナリ」[11]と自身の心情を吐露している。その後、駿河台のニコライ堂を経由して、東京高等師範学校、神田明神、湯島天神、不忍池、寛永寺、上野動物園、東京教育博物館、回向院などを見物した。三菱会社、郵便電信本局、三井銀行、日本銀行などを巡り、造幣局では「毎日紙幣製造ノ出入ノ男女八百人アルヨシ」[12]と、その規模に感嘆する。さらに、大蔵省をはじめとする省庁や裁判所を見物し、歌舞伎座や水天宮にも訪れた。一月二十三日には、汽車を利用して成田山新勝寺への参詣を果たす。

一月二十四日から東海道の旅がはじまる。汽車と徒歩移動を組み合わせて横浜界隈、鎌倉、江の島などの名立たる場所を見物し、藤沢からは汽車に揺られて興津で下車した。その後は徒歩で清見寺、三保の松原といった名所を巡って久能山に登る。静岡からは汽車を乗り継いで伊勢の宮川で下車し、伊勢神宮付近の宇治まで歩いて、泉館太夫家の旅館に宿泊した。

③　伊勢～奈良

一月二十九日、菅原豊治らは伊勢神宮への参詣を達成し、神楽もあげた。伊勢滞在中は徒歩で朝熊山へ赴き、二見が浦を訪れて二見興玉神社にも詣でている。伊勢出立後は徒歩で長浜まで移動し、長浜～三輪崎間は蒸気船を利用して海路を行く。

三輪崎からは歩いて那智山に差し掛かり、難所を経て湯の峰温泉にも入湯しつつ熊野詣でを行った。この間、浜ノ宮王子権現や青岸渡寺にも参詣している。そこから主に徒歩移動が続き、和歌山の紀三井寺を経て高野山詣でを果たし、吉野などを見物しつつ神武天皇御陵に至る。御陵からは汽車に乗って奈良まで移動した。

④　奈良～金毘羅

奈良では、長谷寺をはじめ春日大社、東大寺、西大寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺など名立たる神社仏閣を熱心に見物し、神武天皇、垂仁天皇、雄略天皇の御陵も訪れている。奈良界隈の記述として、「この地名所旧跡多し 枚挙ニ遑〔いとま〕アラズ」[13]とあり、感嘆している様子がわかる。

そこから、徒歩で道明寺や葛井寺を経由して堺まで移動して大坂天満宮に参詣する。住吉神社付近からは汽車に乗り、大阪市内に到着した。大阪では寺社や府庁、議事堂を見物して、夕方より多度津行きの船に乗り、一晩中、大阪湾と播磨灘を航海して明け方には多度津に辿り着いた。

⑤　金毘羅～京都

金毘羅神社（金刀比羅宮）への参詣を済ませた一行は、船で多度津港から田ノ口へと渡った。雪の降る中、田ノ

口から岡山市へ歩いて移動し、その間、由加神社や吉備津神社、斑鳩寺にも参詣した。岡山到着後は市内を見物し、「公園地日本一ナリ 公園地ニハ物産陳列場」[14]との見聞を書き留めている。「公園地」とは岡山後楽園のことで、敷地内の物産陳列場にも足を運んだようである。その後は、徒歩で藤井まで行くと、藤井～龍野間は汽車移動している。

龍野からは徒歩を中心として、所々汽車や船に乗って淀まで向かった。途中、書写山円教寺、曽根天満宮、生石神社、姫路城、高砂神社、浜ノ宮天満宮、勝尾寺、石清水八幡宮などを訪れている。淀を出立すると、大善寺、宇治萬福寺、上醍醐などに参りながら三条大橋まで歩き、京都に到達した。

⑥　京都～松本

京都では、貪欲に寺社を参詣して回っている。平安神宮、知恩院、南禅寺、八坂神社、清水寺、六波羅蜜寺、三十三間堂、広方寺、東西本願寺、六角堂、東寺、北野天満宮などを一日で駆け巡った。その夜、汽車で京都を発って東海道を大津まで移動する。大津で下車すると、三井寺、竹生島宝厳寺、長命寺などの名刹に詣でながら彦根までは歩いて旅をした。

彦根から垂井までは汽車移動、そこから岐阜まで歩き、再び汽車で清須に至る。以降は名古屋経由で中山道に入り、本山までは延々と徒歩で先を急いだ。本山からは馬車に乗って松本に辿り着く。[15]

⑦　松本～花巻

松本を出立した後は、徒歩移動で善光寺への参詣を達成した。善光寺からは汽車に乗り込み、軽井沢、前橋で乗

り換えて大間々で下車し、日光まで歩く。その途中、足尾銅山の「足尾銅山運送蒸機場」[16]にも見物に訪れた。日光東照宮に参詣した折には、「家康公廟 普請ノ結構堂社 金銀のチリバメ人目ヲ驚カスバカリ 中々筆紙舌頭ノ及ブ所ニアラス」[17]と記す。東照宮参詣がこの旅のハイライトであったかのような書きぶりである。

その後、日光からは汽車に乗って宇都宮に至り市内を見物、さらに汽車で仙台まで到達した。明治二十九（一八九六）年三月十三日、朝八時仙台発の汽車に乗車して正午に花巻駅に到着し、各々帰宅の途につく。実に五七日間におよぶ大旅行がついに幕を閉じた。旅日記の最後は、「一同相揃 無異帰宅致候也」[18]と締め括れられている。

四、道中の移動手段

『道中記』の旅の移動手段は、汽車と徒歩が大半を占め、人力車や馬車の利用が僅かに確認される。以下では、汽車移動と徒歩移動について、当時の実情を踏まえながら検討することにしたい。

①　汽車移動

日本の鉄道運行は、明治五（一八七二）年の新橋～横浜間の開通にはじまるが、旅行文化そのものに大きな変革を及ぼしたのは、明治二十二（一八八九）年の東海道線の全線開通であったといわれる。[19]男性の脚で二週間以上を要した東京～神戸間を一日で結ぶ鉄道の登場は、伊勢参宮の様相にも影響を及ぼしていった。

当時の鉄道の敷設状況は、明治二十二（一八八九）年の東海道線開通を皮切りに、明治二十三（一八九〇）年の上野～日光間、草津～四日市間の開通、明治二十四（一八九一）年の上野～青森間の開通、明治二十六（一八九三）年の上野～直江津間の開通など、次々と日本国内に鉄道網が張り巡らされていった。さらに、明治二十七（一

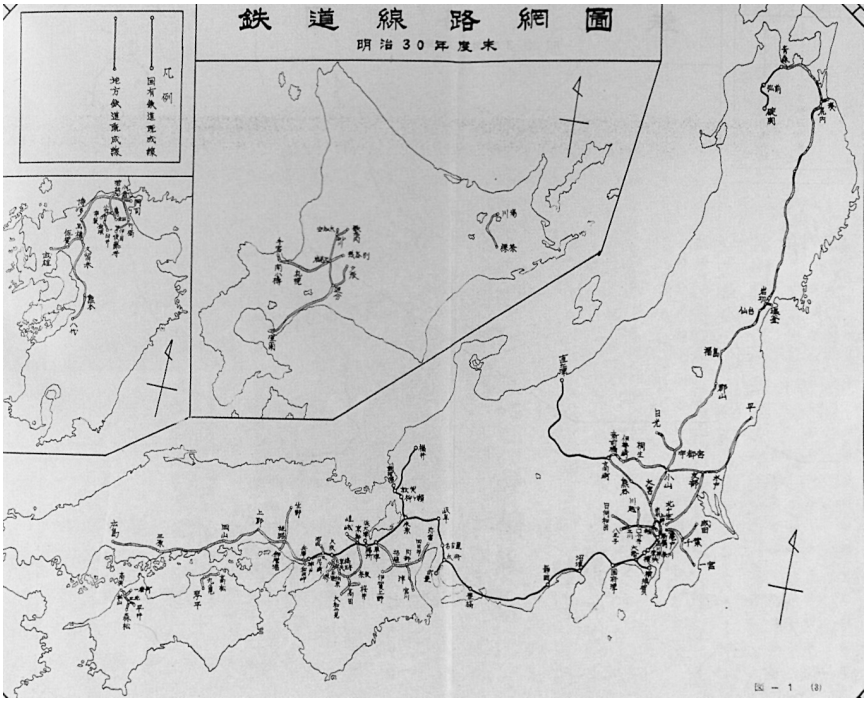

図３　明治30年度末の日本国内の鉄道網

日本国有鉄道編『鉄道技術発達史 第2篇 第1』日本国有鉄道、1959年より。

八九四）年の山陽鉄道の神戸～広島間開通は、日清戦争の際に東日本から大量の兵士を出港地である広島まで輸送することを可能にした。[20]

名立たる神社仏閣に観光客を輸送するための路線も登場する。『道中記』の旅で利用している鉄道で言えば、明治二十六（一八九三）年開通の参宮鉄道（津～宮川間）、明治二十七（一八九四）年開通の総武鉄道（本所～佐倉間）などが該当する。

図３は、明治三十（一八九七）年度末時点における日本国内の鉄道敷設状況である。『道中記』の旅が行われた明治二十九（一八九六）年とそこまで変わるところはない。

図２の地図より、『道中記』において鉄道を利用した区間を確認してみると、

菅原豊治らは、鉄道が敷設されている区間では割と汽車移動をする傾向にあったことがわかる。もちろん、鉄道が通っていても徒歩を選択しているケースもあるし、鉄道開通以前の区域であっても、そのエリアを旅程から除外せずに徒歩移動を敢行している。鉄道を積極的に利用しながらも、近世的な旅を追想しようとした感覚が見られる。

表２は『道中記』の旅における汽車移動の情報を一覧にしたものである。汽車に乗った日には発着時刻が明記されている場合も多く、菅原豊治が道中で時間を気にかけていた様子がうかがえる。このことは、彼が几帳面であったというよりも、当時の一般的な感覚を示すものであった。鉄道の開業によって、日本人は太陽の位置を基準とする「刻・半刻」といった不定時法から、「分・秒」きざみでの西洋的な定時法へと時間認識の改革を迫られたからである。[21]

一覧表より『道中記』における汽車の利用状況がわかるが、これだけでは彼らが鉄道から受けた恩恵が判然としない。そこで、菅原豊治らとほぼ同一ルートで、日詰郡山（岩手県二戸市）より文化十一（一八一四）年に伊勢参宮をした男性の旅日記を引くと、在地出立後、江戸に着いたのは一九日目、伊勢到着は三五日目のことであった。[22] 一方、『道中記』では花巻を旅立ってから東京に着いたのは僅か三日目で、伊勢までは九日間で移動している。鉄道の普及が日本人の伊勢参宮に急激なスピード化を促したことに疑う余地はない。

表２には日記に書き残された範囲での「汽車賃」も掲載した。時代を超えた貨幣価値の比較は容易ではないが、汽車の利用には相応の経済的な負担が発生する。そのため、菅原豊治は汽車賃の割引の有無にも敏感であった。興津駅で下車した地点では「注意 東海道線路ハ遠近ノ割引ナシ」[23]、奈良駅で下車した際には「私設鉄道割引アリ」[24]と記している。

また、汽車に乗って一足飛びに目的地に行けるような時代が到来してからは、近世的な旅の楽しみ方を漏れなく

享受することは難しかったといわねばならない。人間が歩く速度で旅が進行していた近世にあって、行く先々の道中の異文化世界に触れて見聞を広めることは大きな意味を持っていたからである。喜多村信節が江戸後期の『嬉遊笑覧』の中で「神仏に参るは傍らにて、遊楽をむねとす。[25]」と記したのは、寺社への信仰を名目に掲げて道中で熱心に遊ぶという、当時の旅のあり様を見事に言い当てている。[26] 鉄道の登場によって、目的地間のエリアは車窓から眺めるだけの「通過地」となってしまい、旅の「道中」は次第に省略化されていった。[27]

ただし、明治二十年代の伊勢参宮において、近世的な感覚が完全に消失したわけではなかった。一月二十六日は藤沢～豊橋間の乗車券を購入しているが、興津で途中下車して近郊の名所を歩いて見物している。菅原豊治はその模様を「興津出口ニ清見寺登参スヘシ 三保ノ松原 田子ノ浦ニテ眺望景色宜シキ所ナリ[28]」、「竜源寺有 前ト同シク風雅宜シ必ス参ベシ 古今無双ノ景地ナリ[29]」と記し、満足した様子である。

② 徒歩移動

前述したように、菅原豊治一行は頻繁に汽車に乗りながらも、道中を歩かなかったわけではない。全行程の五七日間のうち、四四日間は徒歩移動をともなう旅であった。徒歩と汽車を組み合わせて移動している日も多い。鉄道が敷設されていない区域では徒歩で移動するのが当時の旅の実情であった。

表3は、『道中記』の内容から菅原豊治らが歩いた区間とその距離を一覧にしたものである。この旅日記には、歩いた区間の距離が旧来の「里・丁」の単位で記録されているので、それを「km」法に置き換えて表を作成した（一里＝約三・九km／一丁＝約一〇九m）。彼らが歩いた距離を合算すると、実に約一二四〇kmにおよぶ。一日に歩いた最長の距離は、和歌山県の湯峰～田辺間の五七・七kmで、一日あたりの平均は約二八・二kmである。日ごとの

表２　『道中記』における汽車の乗車

日付（新暦）	乗車区間	発車時刻	到着時刻	汽車賃
１月17日	花巻～松島	12時50分（花巻発）	20時00分（松島着）	２円２銭（花巻～宇都宮）
１月18日	塩釜～仙台		11時40分（仙台着）	
１月19日	仙台～上野	７時00分（仙台発）	20時00分（上野着）	79銭（宇都宮～上野）
１月23日	本所～佐倉	６時30分（本所発）		40銭（本所～佐倉）
	佐倉～本所	16時30分（佐倉発）		
１月24日	川崎～横浜			８銭（川崎～横浜）
１月25日	横浜～大船	10時22分（横浜発）		11銭（横浜～大船）
１月26日	藤沢～興津	７時58分（藤沢発）		１円58銭（藤沢～豊橋）※この日は興津下車
１月27日	静岡～豊橋	11時27分（静岡発）	16時00分（豊橋着）	
１月28日	豊橋～宮川	７時00分（豊橋発）	15時00分（宮川着）	１円27銭（豊橋～宮川）
２月14日	初瀬～奈良		11時00分（奈良着）	23銭（初瀬～奈良）
２月16日	住吉神社～大坂			４銭（住吉神社～大坂）
２月21日	藤井～龍野	13時20分（藤井発）		48銭（藤井～龍野）
２月25日	（不明）～山崎			５銭（不明～山崎）
２月27日	山科～大津	19時00分（山科発）		８銭（山科～大津）

3月1日	彦根～垂井	8時16分 （彦根発）		20銭 （彦根～垂井）
3月2日	岐阜～清須	13時00分 （岐阜発）		14銭 （岐阜～清須）
3月9日	善光寺～軽井沢	15時10分 （善光寺発）		60銭 （善光寺～軽井沢）
3月10日	軽井沢～大間々	6時20分 （軽井沢発）		42銭 （軽井沢～前橋） 18銭 （前橋～大間々）
3月12日	日光～仙台	14時20分 （日光発） 18時00分 （宇都宮発）		2円25銭 （日光～花巻）
3月13日	仙台～花巻	8時00分 （仙台発）	12時00分 （花巻着）	

菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』1896年より。

表3　『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』における歩行距離

日数	新暦	出立	宿泊	天候	歩行距離	歩行区間
1日目	1月17日	花巻	高城			
2日目	1月18日	高城	仙台			
3日目	1月19日	仙台	上野	晴		
4日目	1月20日	上野	馬喰町	晴		
5日目	1月21日	馬喰町	馬喰町	晴		
6日目	1月22日	馬喰町	馬喰町	晴		
7日目	1月23日	馬喰町	本所	晴	13.6km	佐倉～成田
8日目	1月24日	本所	横浜	晴	17.5km	本所～川崎
9日目	1月25日	横浜	江の島	晴	11.7km	大船～江の島
10日目	1月26日	江の島	久能		16.7km	江の島～藤沢 興津～久能
11日目	1月27日	久能	豊橋		11.7km	久能～静岡
12日目	1月28日	豊橋	泉館太夫宅		7.4km	宮川～宇治
13日目	1月29日	泉館太夫宅	泉館太夫宅			

14日目	１月30日	泉館太夫宅	二見	晴	17.5km	内宮～二見
15日目	１月31日	二見	栃原	晴	33.3km	二見～栃原
16日目	２月１日	栃原	長浜	晴	51.1km	栃原～長浜
17日目	２月２日	長浜	三輪崎	晴	11.7km	三輪崎～新宮 新宮～三輪崎
18日目	２月３日	三輪崎	那智山	晴	19.4km	宿屋～那智山
19日目	２月４日	那智山	湯峰	雨	15.0km	那智～小口 船着場～湯峰
20日目	２月５日	湯峰	湯峰	雨	5.2km	湯峰～本宮 本宮～湯峰
21日目	２月６日	湯峰	田辺	晴	57.7km	湯峰～田辺
22日目	２月７日	田辺	原谷		35.2km	田辺～原谷
23日目	２月８日	原谷	和歌山市	晴	48.2km	原谷～紀三井寺 和歌の浦～ 和歌山市
24日目	２月９日	和歌山市	粉川	雨	13.6km	和歌山市～ 八軒屋 （不明）～粉川
25日目	２月10日	粉川	遍照光院	晴	27.8km	粉川～遍照光院
26日目	２月11日	遍照光院	遍照光院		7.6km	遍照光院～ 奥の院 奥の院～ 遍照光院
27日目	２月12日	遍照光院	河田	晴	35.1km	遍照光院～河田
28日目	２月13日	河田	神武天皇御陵	雪	44.9km	河田～ 神武天皇御陵
29日目	２月14日	神武天皇御陵	奈良			
30日目	２月15日	奈良	道明寺	晴	30.6km	神武天皇御陵～ 道明寺
31日目	２月16日	道明寺	大坂	晴	11.7km	道明寺～堺
32日目	２月17日	大坂	船中泊	晴		
33日目	２月18日	船中泊	多度津	晴	24.3km	多度津～ 金毘羅神社 金毘羅神社～ 多度津

34日目	2月19日	多度津	田ノ口	風		
35日目	2月20日	田ノ口	岡山市	朝雪	36.9km	田ノ口～岡山市
36日目	2月21日	岡山市	鵤	朝雪	14.1km	岡山市～藤井 龍野～鵤
37日目	2月22日	鵤	高砂	晴	34.9km	鵤～高砂
38日目	2月23日	高砂	須磨	晴	34.6km	高砂～須磨
39日目	2月24日	須磨	池田	雨天	43.5km	須磨～池田
40日目	2月25日	池田	淀	曇	33.5km	池田～（不明） 山崎～男山 石清水～淀
41日目	2月26日	淀	三条大橋	晴	25.3km	淀～三条大橋
42日目	2月27日	三条大橋	大津	晴		
43日目	2月28日	大津	八幡		35.9km	大津～八幡
44日目	2月29日	八幡	玄宮	風吹	31.6km	八幡～玄宮
45日目	3月1日	玄宮	そゑ	朝雪	44.7km	玄宮～彦根 垂井～そゑ
46日目	3月2日	そゑ	津島	大雪	23.6km	そゑ～岐阜 清州～津島
47日目	3月3日	津島	勝川	晴	25.3km	津島～勝川
48日目	3月4日	勝川	釜戸	晴	34.9km	勝川～釜戸
49日目	3月5日	釜戸	三留野	雪	51.7km	釜戸～三留野
50日目	3月6日	三留野	宮越	雪	47.2km	三留野～宮越
51日目	3月7日	宮越	松本	晴	27.5km	宮越～本山
52日目	3月8日	松本	稲荷山	晴	46.1km	松本～稲荷山
53日目	3月9日	稲荷山	軽井沢	晴	15.6km	稲荷山～長野市
54日目	3月10日	軽井沢	神戸	晴	13.9km	大間々～神戸
55日目	3月11日	神戸	日光町	雪	53.3km	神戸～日光町
56日目	3月12日	日光町	仙台	雪		
57日目	3月13日	仙台	花巻			

菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』1896年より。

歩行距離を十km単位でカウントしていくと、一桁台が三日、一〇km台が一四日、二〇km台が六日、三〇km台が一一日、四〇km台が六日、五〇km台が四日となる。

この歩行距離を近世の旅人と比較してみたい。近世後期に東北地方から伊勢参宮をした庶民の旅日記より、『道中記』と近いルートを辿ったものを抽出して、その歩行距離を示したものが表4である。徒歩中心の旅をしていた時代にあって、東北地方から伊勢参宮をした人々は長い日には五〇～六〇km、一日あたりの平均では三五kmを歩いている。

このように、『道中記』の旅は、近世の旅人と比べれば歩行距離は減っているものの、明確な違いが見受けられるわけではない。菅原豊治を含む一〇名の旅人は、鉄道をはじめとする文明の利器に頼り切っていたのではなく、近世の旅人と変わらぬ健脚の持ち主であった。明治二十年代末に至っても徒歩移動の慣習は依然として残り、近世的な旅の世界は健在だったといえよう。

長距離を歩いた一行は、足への気配りも忘れてはいなかった。例えば、二月二日の長浜～三輪崎間を蒸気船で移動しているが、その理由は尾鷲（三重県尾鷲市）付近の陸路の難所を避けることにあった。当日の記述として、「足痛ノ者ハ必ズ船ニ乗ル方宜シ　陸行ヘ八鬼山越トテ難儀ナリ」[30]とあり、「八鬼山越」という熊野古道の難所[31]を回避すべく六〇銭を支払って蒸気船に乗ったことがわかる。ほかにも、二月六日は湯の峰～田辺間を歩いて移動しているが（この旅での最長歩行距離を示した日）、旅日記には「モシ足之痛アラハ　和歌山マデ船ニ至のれり」[32]と記され、足が痛む場合には乗船することを推奨している。二月十四日の奈良界隈の見物においては、「足痺ニ付ふ参（参らず―引用者注）」[33]とあり、足の痺れが原因で寺社参詣を断念した。

天候が徒歩移動に影響を及ぼすケースもあった。三月三日は、勝川（愛知県春日井市）に到着した際に「午后三

表４　近世後期における東北地方からの伊勢参宮の歩行距離

表題	年代	歩行距離（km）			
		総距離	平均	最長	最短
西国道中記	1783	3018.7	30.2	58.6	7.8
伊勢参宮道中記	1786	2173.2	29.8	63.1	3.9
伊勢参宮所々名所並道法道中記	1794	2439.2	33.4	56.7	5.8
道中記	1799	2285.8	34.1	53.1	7.6
遠州秋葉・伊勢参宮道中記	1805	1898.5	35.2	58.1	7.8
御伊勢参宮道中記	1805	1837.4	35.3	60.6	11.7
道中記	1814	2773.9	34.7	59.7	6.3
伊勢参宮西国道中記	1818	3014.3	35.9	67.9	9.7
伊勢参宮旅日記	1823	2939.6	43.2	74.5	19.3
伊勢道中記	1826	2944.3	37.3	58.5	5.3
（表題不明）	1830	2583.2	33.1	61.8	6.0
（表題不明）	1831	1996.6	35.7	65.5	11.7
万字覚帳	1835	2139.9	32.9	53.6	7.8
道中日記	1836	2737.4	36.0	71.9	11.2
伊勢参宮道中日記帳	1841	2424.1	32.8	58.9	7.8
西国道中記	1841	2717.1	37.2	67.5	9.7
道中記	1849	2594.4	35.1	56.7	7.8
（表題不明）	1849	2413.7	35.0	63.1	15.5
道中日記帳	1856	1661.4	33.9	54.8	2.1
道中記	1857	3174.8	35.3	74.3	6.1
伊勢参宮并熊野三社廻り金毘羅参詣 道中道法附	1859	2861.2	34.9	70.8	9.2

谷釜尋徳「近世における東北地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離―旅日記（1691～1866年）の分析を通して―」『スポーツ健康科学紀要』12号、2015年、32～33頁より。

時半着　雨天ノタメ」[34]と記し、雨天を理由にまだ日の高いうちに歩みを止めている。表三の天候の欄（日記に未記入の場合は空欄）を見ると、雨天の記載がある日は歩行距離が延びていない日が多い。ただし、三月二日のように「大雪」でも二〇km以上歩いている日もあるので、『道中記』の旅に関しては天候と歩行距離との相関関係を読み取ることは難しいといわねばならない。

五、道中の楽しみ方　―見物行動の実際―

『道中記』は汽車を利用した旅の記録であるが、菅原豊治らは道中を重んじる近世的な旅の楽しみ方を忘れてはいなかった。表5に示されるように、彼らは、行く先々で名立たる寺社や風光明媚な場所、近代的な建築物や施設を貪欲に見物しているからである。

以下では、『道中記』の旅にみる道中の見物行動の実際を確かめていきたい。

①　寺社参詣・名所見物

『道中記』には、寺社参詣および名所見物の足跡が詳しく記されている。近世以来の日本で醸された娯楽としての旅は、各地の寺社や名所を巡って楽しむことがメインに据えられていたが[35]、明治中頃に生きる菅原豊治らも近世的な旅の傾向を踏襲していたことがわかる。花巻を発った後は、江戸、鎌倉、久能山、伊勢、高野山、奈良、大阪、金毘羅、岡山、京都、善光寺、日光を結ぶエリアにおいて多くの寺社や名所を訪れている。また、この旅が西国三十三所順礼を兼ねている点も一つの特徴である。定められた三三カ所の霊場寺院のうち、二一カ所への参詣を達成している（表中には「西国〇番」と表記）。

表５　『道中記』における見物行動

日数	新暦	出立	宿泊	名所・寺社など	都市・近代建造物など
1日目	1月17日	花巻	高城		
2日目	1月18日	高城	仙台	松島、塩竈神社、など	仙台鎮台、仙台紡績所、学校、県庁、議事堂、商館、警察署、中学校、など
3日目	1月19日	仙台	上野		
4日目	1月20日	上野	馬喰町	浅草観音、など	凌雲閣、など
5日目	1月21日	馬喰町	馬喰町	東京招魂社、神田明神、将門神社、大成殿（湯島聖堂）、湯島天神、不忍池、不忍弁才天、寛永寺、上野東照宮、三囲稲荷、回向院、など	ニコライ堂、高等師範学校、同付属博物館、上野三枚橋、上野動物館、東京教育博物館、吾妻橋、厩橋、両国橋、など
6日目	1月22日	馬喰町	馬喰町		荒布橋、江戸橋、三菱会社、七ツ□、郵便電信本局、三井銀行、越後屋、日本銀行、五本丸入口、常盤橋外堀、造幣局、大蔵省、会計検査院、内務省、大手御門、憲兵司令部、二ノ堀、控訴院、司法省、大審院、地方裁判所、東京市庁、明治保険会社、和田倉御門、和田倉橋、宮内省、坂下御門、西ノ丸、三ノ堀、二重橋、櫻田御門、陸軍参謀本部、司法省、地方裁判所、近衛師団兵司令部、海軍省、外務省、霞ヶ関、露国公使館、貴族院、衆議院、議長宅、山下御門、外堀、鍋島屋敷、芝愛宕、通信省、農商務省、歌舞伎座、鎧橋、水天宮、など
7日目	1月23日	馬喰町	本所	惣五宮、成田不動尊、など	
8日目	1月24日	本所	横浜		
9日目	1月25日	横浜	江の島	円覚寺、鶴岡八幡宮、大仏、長谷観音、江の島弁財天、奥の院、など	神奈川県庁、地方裁判所、異人家、など
10日目	1月26日	江の島	久能	遊行寺、竜泉寺、清見寺、三保の松原、田子の浦、など	
11日目	1月27日	久能	豊橋	久能山東照宮、など	
12日目	1月28日	豊橋	泉館太夫宅	伊勢神宮（外宮）、など	
13日目	1月29日	泉館太夫宅	泉館太夫宅	伊勢神宮（内宮）、など	

14日目	１月30日	泉館太夫宅	二見	伊勢神宮（内宮）、朝熊山、など	
15日目	１月31日	二見	栃原	二見が浦、二見興玉神社、など	
16日目	２月１日	栃原	長浜	境原神社、など	
17日目	２月２日	長浜	三輪崎		
18日目	２月３日	三輪崎	那智山	丹補神社、浜ノ宮王子権現、青岸渡寺（西国１番）、など	
19日目	２月４日	那智山	湯峰		
20日目	２月５日	湯峰	湯峰	熊野神社本宮、など	
21日目	２月６日	湯峰	田辺		
22日目	２月７日	田辺	原谷		
23日目	２月８日	原谷	和歌山市	得生寺、□□寺、地蔵寺、松岡観音、紀三井寺（西国２番）、など	
24日目	２月９日	和歌山市	粉川	厄除観音、粉川寺（西国３番）、など	
25日目	２月10日	粉川	遍照光院	高野山大門、遍照光院、袈裟掛石、押上石、など	
26日目	２月11日	遍照光院	遍照光院	高野山、など	
27日目	２月12日	遍照光院	河田		
28日目	２月13日	河田	神武天皇御陵	吉野大社、大峰山、談山神社、岡寺（西国７番）、橘寺、橿原神社、など	
29日目	２月14日	神武天皇御陵	奈良	長谷寺（西国８番）、神武天皇御陵、猿沢池、春日大社、三笠山、東大寺、など	
30日目	２月15日	奈良	道明寺	法花寺、西大寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺、垂仁天皇御陵、雄略天皇御陵、竜田神社、道明寺、道明寺天満宮、葛井寺（西国５番）、など	
31日目	２月16日	道明寺	大坂	大坂天満宮、妙福寺、住吉神社、浪花屋の松、など	北村商舗、など
32日目	２月17日	大坂	船中泊	天王寺、□□神社、□簾橋、旧城鎮台、四ツ橋、鴻ノ池長者、府庁、議事堂、など	
33日目	２月18日	船中泊	多度津	金毘羅神社、など	
34日目	２月19日	多度津	田ノ口		

35日目	2月20日	田ノ口	岡山市	由加神社、吉備津神社、など	
36日目	2月21日	岡山市	鵤	斑鳩寺、古城、七重□、など	公園地〔岡山後楽園〕、公園地内の物産陳列場、会議場、など
37日目	2月22日	鵤	高砂	書写山円教寺（西国27番）、曽根天満宮、生石神社の石ノ宝殿、姫路城、など	
38日目	2月23日	高砂	須磨	高砂神社、相生の松、尾上の松、尾上神社、浜ノ宮天満宮、須磨寺、など	
39日目	2月24日	須磨	池田	能福寺、平清盛の墓、兵庫大仏、湊川神社、楠木正成の墓、蛭子神社、中山寺（西国24番）、など	
40日目	2月25日	池田	淀	龍安寺弁才天、如意輪観音堂、勝尾寺（西国23番）、総持寺（西国22番）、石清水八幡宮、箕面の瀧、千手観音、十一面観音、など	
41日目	2月26日	淀	三条大橋	大善寺、宇治萬福寺、上醍醐（西国11番）、伏見六地蔵、三条大橋、など	
42日目	2月27日	三条大橋	大津	平安神宮、聖護院、金戒光明寺、知恩院、南禅寺、栗田御殿、八坂神社、法観寺、清水寺（西国16番）、六波羅蜜寺（西国17番）、蓮華王院三十三間堂、広方寺、大仏、豊国神社、東本願寺、西本願寺、六角堂頂法寺（西国18番）、東寺、如意輪観音、北野天満宮、革堂行願寺（西国19番）、今熊野観音寺（西国15番）、鎧掛松、扇松、左甚五郎の忘れ傘、五重塔（八坂の塔）、千手観音、音羽滝、十一面観音堂八間、耳塚、御所、など	博覧会場、など
43日目	2月28日	大津	八幡	三井寺（西国14番）、如意輪観音、石山寺（西国13番）、如意輪観音、竹生島宝厳寺（西国30番）、近江八景「石山の秋月」、など	
44日目	2月29日	八幡	玄宮	長命寺（西国31番）、浄楽寺、観音寺、薬師堂、千手観音堂、など	
45日目	3月1日	玄宮	そゑ	華厳寺（西国33番）、など	

46日目	3月2日	そゑ	津島	津島神社、など	
47日目	3月3日	津島	勝川	甚目寺、名古屋城、など	
48日目	3月4日	勝川	釜戸		
49日目	3月5日	釜戸	三留野		
50日目	3月6日	三留野	宮越	浦島太郎の古跡、など	
51日目	3月7日	宮越	松本		
52日目	3月8日	松本	稲荷山		
53日目	3月9日	稲荷山	軽井沢	善光寺、など	
54日目	3月10日	軽井沢	神戸		
55日目	3月11日	神戸	日光町		足尾銅山、など
56日目	3月12日	日光町	仙台	日光東照宮、など	宇都宮市内見物、など
57日目	3月13日	仙台	花巻		

菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』1896年より。

菅原豊治の文章には、寺社や名所旧跡に対する評価も含まれている。例えば、成田山新勝寺では「境内ノ美ナルハ筆舌尽難シ」[36]、静岡では「三保ノ松原 田子ノ浦ニテ眺望景色宜シキ所ナリ」[37]および「竜源寺有 前ト同シク風雅宜シ必ス参ベシ 古今無双ノ景地ナリ」[38]、久能山では「普請結構 広大美簾ナルハ筆紙ニ尽難シ」[39]、吉野大社では「此春之桜町ナラバ随分宜シカルベシ 一面ニ桜木ナリ」[40]といった具合である。

一行は、寺社参詣や名所見物の際に手荷物を一時的に預けるサービスも利用している。奈良界隈にて「猿沢池側かまや喜八ニ荷物ヲ置 弁当を貰ヒ 名所古跡参詣」[41]、石山寺付近にて「コノ所宿屋ニ荷物を置 参詣すべし」[42]と記載されているように、宿屋に手荷物を預けて軽装で見物に出掛けた。手荷物の一時預かりサービスは近代になって登場したものではなく、近世の街道筋においてすでに見られた業態である[43]。

こうした旅の楽しみ方は、近世から近代への連続性を示している。柳田は、近世の巡礼の意義を「道途」に求めたうえで、「今日の汽車も同じように、団体で共にあるく点に目的の中心を置いていたのである。（中略）この行楽の興味は忘れがたかったもの

と見えて、明治に入っても巡礼は決して衰微していない。[44]」と指摘している。巡礼という「行楽」目的の旅のスタイルは鉄道が普及してからも衰えず、近世的な旅のスタイルが引き継がれたのである。

②　都市部における見物行動の特徴

『道中記』の旅では、由緒正しい寺社や風光明媚な名所を見物する傾向にあったが、それに加えて、都市部では近代的な建築物や施設を熱心に見物している様子がうかがえる。

最初に訪れた都市は仙台である。仙台では、仙台鎮台、仙台紡績所、学校、県庁、議事堂、商館、警察署、中学校などを見物した。

東京見物については先にも触れたが、湯島天神や回向院をはじめとする近世以来の寺社に詣でながら、凌雲閣、ニコライ堂、東京高等師範学校、上野動物園、東京教育博物館、三菱会社、郵便電信本局、三井銀行、越後屋、日本銀行、造幣局、大蔵省、会計検査院、内務省、憲兵司令部、控訴院、司法省、大審院、地方裁判所、東京市庁、明治保険会社、宮内省、陸軍参謀本部、司法省、地方裁判所、海軍省、外務省、霞ヶ関、露国公使館、貴族院、衆議院、議長宅、鍋島屋敷、通信省、農商務省など、近代になって登場した建築物や施設、省庁、大会社を巡る内容となっている。無論、近世の江戸見物には見られなかった内容である。

横浜では、「当市見物 神奈川県庁 地方裁判所 異人家 町家並奇簾ナリ 海岸ニ桟橋ヲ架シ 荷物運搬便利也 能々尋ネ見物スヘシ[45]」と記され、やはり近代的な事物に惹かれている状況が見て取れる。足尾銅山を訪れているのも、同様の傾向であろう。

③　日清戦争の影響

鉄道の延伸が日清戦争と不可分であったことは先に述べた通りであるが、日清戦争終結の翌年に行なわれた『道中記』の旅では、日清戦争の影響が顕著に反映されている。日清戦争の「戦利品」は、日本国内の寺社や学校、陳列場等に配布されていたが[46]、菅原豊治一行は行く先々で関連の品々と遭遇することになる。

浅草凌雲閣では、「堂内の廻リ登レバ　日清戦争ノ絵画ノ大月鏡ナド有[47]」と記され、日清戦争関連の絵画を観覧した。また、上野動物園では、「日清戦争ノ際　旅順口ニテ生捕シ駱駝四頭[48]」と書き残す。この前年の明治二十八（一八九五）年、日清戦争において旅順口で捕獲されたフタコブラクダが同園に展示されている。さらに、明治三十（一八九七）年には、日清戦争の「戦利品動物特別展示場」が開設され、動物園は一面において国家主義イデオロギーを浸透させる役割も果たすことになった[49]。他にも、鎌倉の鶴丘八幡宮で「日清戦争ノ際分捕品沢山アリ[50]」と記し、岡山の吉備津神社付近では戦勝記念品として砲弾の存在を確認している[51]。

菅原豊治一行の道中の見物行動には、泰平の世における旅とは異なり、対外戦争を経験した時代ならではの世相を反映したテイストが織り込まれていた。

六、近世と近代の過渡期の旅　―むすびにかえて―

以上、本稿では、明治二十九（一八九六）年に花巻から伊勢参宮をした十名の旅の模様を辿ってきた。近世の旅と比較して最も大きな違いは、交通手段の発達であろう。鉄道の登場と延伸は日本人に時間意識の近代化を迫り、従来の旅のスタイルにも大きな変革をもたらした。人間の移動速度で旅が進行していた時代とは異なり、圧倒的なスピードで目的地間を結ぶ汽車に乗ることで、旅人は時間と引き換えに行く先々の「道中」を手放したことに疑う

余地はない。しかし、この時代の旅はまだ近世的な旅の伝統が息づいていたようで、彼らは鉄道が敷設されていない区間では、近世人と同等の健脚ぶりを見せ、寺社、名所、都市などを熱心に見物している。

当時の汽車は、明治二十二（一八八九）年の東海道線全通時でいえば、新橋～神戸間を二〇時間余りで移動し、値段は下等料金で三円七六銭であったという。[52] 一方、近世の旅では、仮に江戸～神戸間（東海道経由）を毎日三五km[53]ずつ歩いて移動した場合、一六日間ほどを要する計算となる。また、近世の旅は一日に概ね四〇〇文の費用がかかったため、[54] 一六日間では約六四〇〇文の旅費が想定される。これを円に換算すれば、六円余りの値段となる。目的地へ早く到達することだけを考えれば、旅費は約半分、スピードは約一六倍、そして体力面でも容易いという「合理的」な旅行の時代が到来したといえそうである。

しかしながら、『道中記』を事例として考察するならば、明治二十年代末の人々は、旅の世界に合理性ばかりを求めたわけではなく、道中の異文化に触れて存分に遊ぼうとする近世的な旅の楽しみ方を選択していたように思えてならない。[55] この時代に至っても、伊勢参宮をはじめとする長距離の国内旅行は、滅多にない旅の機会に道中の異文化に触れて見聞を広めるという役割を担っていたのではないだろうか。

このような、近世と近代の過渡期の旅の事情がものの見事に反映された五七日間の旅が、『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』という旅日記だったと結んでおきたい。

【注記及び引用・参考文献】

（1）菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年

（2）山本光正『江戸見物と東京観光』臨川書店、二〇〇五年。山本光正「旅から旅行へ―近世・近代の旅行史とその課題―」『交通史研究』六〇号、二〇〇六年、一～一六頁。山本光正「鉄道の発達と旧道への回帰」『国立歴史民俗博物館研究報告』八二集、

一九九九年、二三～五八頁。山本光正「東海道の旅から旅行へ」『東海道中近代膝栗毛―歩く旅と鉄道の旅―』品川区立品川歴史館、二〇〇〇年、六四～六七頁。山本光正「江戸の旅から鉄道旅行へ」『第六六回歴博フォーラム 旅 江戸の旅から鉄道旅行へ』国立歴史民俗博物館、二〇〇八年、二～五頁。中西聡『旅文化と物流』日本経済評論社、二〇一六年、七五～一三二頁。平山昇『鉄道が変えた社寺参詣』交通新聞社、二〇一二年。

(3) 山本光正『江戸見物と東京観光』臨川書店、二〇〇五年、一一七頁。

(4) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、四丁。

(5) 同右、十丁。

(6) 同右、四八丁。

(7) 谷釜尋徳「近世後期の東北地方の庶民男女による伊勢参宮の旅のルートと歩行距離」『東洋法学』六〇巻一号、二〇一六年、一〇六～一〇九頁。

(8) 山本光正「東海道の旅から旅行へ」『東海道中近代膝栗毛』品川区立品川歴史館、二〇〇〇年、六五頁。

(9) 新城常三『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会、一九七一年、一四五～一五〇頁。

(10) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、二丁。

(11) 同右、二丁。

(12) 同右、四丁。

(13) 同右、二四丁。

(14) 同右、二八丁。

(15) 『道中記』には、馬車に乗った際に騙されたエピソードが記されている。菅原豊治らは、長野県の本山～松本間を馬車で移動しているが、松本に着いたと言われて下車したものの、そこは目的地の松本宿よりも一km以上も手前であった。そのため、結局松本宿までは歩かなければならず、この日の日記には「注意して泊る〔止まる〕べし」と書いた（菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、四一丁）。

(16) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、四三丁。
(17) 同右、四四丁。
(18) 同右、四八丁。
(19) 山本光正「東海道の旅から旅行へ」『東海道中近代膝栗毛―歩く旅と鉄道の旅―』品川区立品川歴史館、二〇〇〇年、六五頁。山本光正『江戸見物と東京観光』臨川書店、二〇〇五年、一四七頁。山本光正「旅から旅行へ」『交通史研究』六〇号、二〇〇六年、一一頁。山本光正「江戸の旅から鉄道旅行へ」『第六六回歴博フォーラム 旅 江戸の旅から鉄道旅行へ』国立歴史民俗博物館、二〇〇八年、三頁。鈴木勇一郎『おみやげと鉄道』講談社、二〇一三年、三〇頁。
(20) 鈴木勇一郎『おみやげと鉄道』講談社、二〇一三年、四八～四九頁。
(21) 宇田正『鉄道日本文化史考』思文閣出版、二〇〇七年、九頁。
(22) 安ヶ平（某）「道中記」『二戸史料叢書 第六集』二戸教育委員会、二〇〇三年、一〇三～一二九頁。
(23) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、七丁。
(24) 同右、二二丁。
(25) 喜多村信節「嬉遊笑覧 巻之七」（一八三〇）『嬉遊笑覧（三）』岩波書店、二〇〇四年、三八一頁。
(26) 柳田國男は、近世の旅（巡礼）の特徴を次のように表現している。「巡礼は日本では面白い形に発達している。（中略）参拝の大きな意義はむしろ道途にあった。ついでに京見物大和廻り、思い切って琴平宮島も掛けて来たという類の旅行も、信心として許されたのであった。」（柳田國男『明治大正期世相篇 新装版』講談社、一九九三年、二一〇頁）
(27) 山本光正『江戸見物と東京観光』臨川書店、二〇〇五年、一四七～一四八頁。
(28) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、七丁。
(29) 同右、七丁。
(30) 同右、一二丁。
(31) 八鬼山以外にも、菅原豊治は徒歩区間の「難所」について記録している。すなわち、二月四日、和歌山県熊野古道の大雲取に

て「此山ヲ大クモ通リト云ヒ 険ソウノ峠也」「上下大難所ナリ」（菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、一三～一四丁）、同日、同地の小雲取にて「小雲通リ也 是レモ甚ダ難所也」（同右、一四丁）、二月十三日、奈良県多武峰の談山神社付近にて「鎌足公ノ御廟ナリ 官幣社也 十三階堂有 随分山坂ニテ難渋ナリ」（同右、二一丁）といった具合である。

(32) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、一五丁。

(33) 同右、二二丁。

(34) 同右、三九丁。

(35) 新城常三『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会、一九七一年、七二頁。

(36) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、五丁。

(37) 同右、七丁。

(38) 同右、七丁。

(39) 同右、七丁。

(40) 同右、二〇丁。

(41) 同右、二二丁。

(42) 同右、三六丁。

(43) 桜井邦夫「近世の道中日記にみる手荷物の一時預けと運搬」『大田区立郷土博物館紀要』九号、一九九九年三月、七五～一二六頁。谷釜尋徳「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際」『スポーツ史研究』二〇号、二〇〇七年三月、一～二二頁。

(44) 柳田國男『明治大正期世相篇 新装版』講談社、一九九三年、二一〇～二一一頁。

(45) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、五～六丁。

(46) 籠谷次郎「日清戦争の『戦利品』と学校・社寺」『社会科学』五六号、一九九六年一月、一～四五頁。

(47) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、二丁。

(48) 同右、三丁。

(49) 若生謙二「近代日本における動物園の発展過程に関する研究」『造園雑誌』四六巻一号、一九八二年七月、四頁。
(50) 菅原豊治『伊勢参宮 四国礼拝 西国順礼道中記』一八九六年、六丁。
(51) 同右、二八丁。
(52) 澤壽次・瀬沼茂樹『旅行百年』日本交通公社、一九六八年、一〇八～一〇九頁。
(53) 近世後期の東北地方の庶民による伊勢参宮の旅日記三七編を対象とした研究によると、一日平均の歩行距離は約三四・八kmであった（谷釜尋徳「近世における東北地方の庶民による伊勢参宮を旅の歩行距離」『スポーツ健康科学紀要』一二号、二〇一五年三月、二三～四八頁）。
(54) 谷釜尋徳「近世後期における江戸庶民の旅の費用」『東洋法学』五三巻三号、二〇一〇年三月、三三～五〇頁。
(55) ただし、中西の研究においては、一八九〇年代の事例として、鉄道によって移動時間を短縮して目的地での滞在時間を確保しようとした旅日記も紹介されているので（中西聡『旅文化と物流』日本経済評論社、二〇一六年、七五～一三二頁。）、この点は一考を要する課題であろう。

―たにがま　ひろのり・東洋大学法学部教授―

【史料翻刻】

明治二十九年

伊勢参宮 四國礼拝 西國順礼道中記

旧 三月 二十一日 出立

陰暦十二月三日　新二十九年一月十七日

当組鎮座皇大神宮於 同行相揃 花巻停車場詰 花巻ヨリ宇都宮マデ 汽車賃二円二銭 午十二時五十分 花巻発 黒沢尻 水沢 前沢 一ノ関 花泉 石越 新田 瀬峰 小牛田 鹿島台ヲ経 松島下車 午后八時着

△高城泊 尾口屋 金十八銭 弁当入

◎四日　一月十八日

午前七時発 松島見物 塩釜マデ小舟雇賃 金六銭六リンヅツ 島々遊覧 午前八時 塩釜上陸 国幣中社也 参詣終テ汽車ニ乗 同十一時四十分仙台着 国分町二丁目 安藤利兵方着 昼飯の喫 午后ヨリ方内見案内無料 大橋ヲ渉リ 川内〔仙台〕鎮台〔大日本帝国陸軍の部隊〕川内〔仙台〕紡績所 大仕掛ノ機械ナリ 見料三銭ヅツ 学校 県庁 議事堂 商館 警察署 中学校 同宿ニ帰ル

△一 金二十二銭 宿泊料

◎五日　晴　一月十九日

午前七時 同市発 増田 岩沼 槻ノ木 大河原 白石 越河 桑折 福島 松川 二本松 本山 郡山 須賀川 矢吹 白河 豊原 黒田原 黒磯 那須野 矢板 長久保 古田 宇都宮 石橋 小金井 久喜 蓮田 大宮 浦和 蕨 赤羽 王子ヲ経テ 午后八時 上野着

宇都宮上野間ノ汽車賃金 七十九銭

停車場前 郡至舎□宿

◎六日　晴　一月二十日

都合ニヨリ当舎発 浅草観音参詣 凌雲閣 入閣料金六銭ヅツ 十二階也 高二十二丈 堂内の廻リ登レバ 日清戦争ノ絵画ノ大月鏡ナド有 既ニ絶頭ニ登レバ 遠望鏡ア

リ見料一銭ヲ出 四方の眺望スレバ 市内眼下ニ物体利然近ク見 風雅宜シ 東本願寺 東本願寺 参詣シテモ案内者ナクステ見物ハハカドラズ

△馬喰町 馬場 伊勢屋清吉泊

金二十五銭 案内料入弁当ナシ

◎七日　晴　一月二十一日

市内見物 九段坂 招魂社〔東京招魂社。後の靖国神社〕我ハ参ラズ遺憾ナリ 駿河台 ニコライ 是ハ卯穂宗教家ノ普請也 見物料無賃 堂内ニ入レハ 金銀ノ細工ニテ人目ヲ驚カス計リ也 高等師範学校 同付属博物館 大成殿 神田明神 将門神社 湯島天神 上野三枚橋 宗〔惣〕五郎将軍家直訴セシ所 不忍池 不忍弁才天 家康公鬼門防除ノタメ池ヲ□ 東叡山〔寛永寺〕ヲ建 東照宮〔上野東照宮〕入口大鳥居 酒井雅楽頭建納 石燈篭金燈篭多シ 上野動物館〔園〕入館料金二銭 鳥獣生魚ノ生体ニシテ 随分珍シキ物色々 この度 日清戦争ノ際 旅順口ニテ生捕シ駱駝四頭 象 虎 豹 熊 羊ノ類 書昼サレス博物館 入館料金三銭 天子様ノ御宝物ノ美術品ノ陳列夥シク 中々見□スベシ能ハス 外草履代五リン 吾妻橋 東京第一ノ鉄橋也 渉リテ向島 盛花ノ時ハ宜シカルヘシ 三囲稲荷 急キ時ハ除キテ宜シ 社内発句詩歌多其尤著名ナルハ普其角先生 雨乞ノ歌有

△ゆふたちや 田を見めぐりの神ならば

厩橋 両国橋 回向院 当院 鼠小僧次郎吉ノ墓有 方々ヨリノ寄附石碑山ヲナシ 線香ノ絶ル間ナシト云 法名左□

教覚速善居士

△徳川下屋敷 藤堂屋敷 同宿帰

◎八日　晴　一月二十二日

市内見物 アラメ橋 江戸橋 三菱会社 七ツ□ 郵便電信本局 三井銀行 越後屋 日本銀行当時普請中 五本丸入口 常盤橋外堀 造幣局 毎日紙幣製造ノ出入ノ男女八百人アルヨシ 大蔵省 会計検査院 内務省 □本大手御門 憲兵司令部 二ノ堀 控訴院 司法省 大審院 地方裁判所

東京市庁 明治保険会社 和田倉御門 同橋 天皇陛下
宮内省 坂下御門 西ノ丸 三ノ堀 二重橋 二重橋ト云ハ
二重ナルニ非ス 外ノ橋ヲ渉リ御門ヲ入リ 又橋ヲ渉ル
也 故ニ是ヲ二重橋ト云ウ 外ノ橋ハ石造ノ内ノ方ハ鉄
橋也 天皇陛下御出入ノ□開門スルト云 常ニハ閉□近
衛兵□刀ニテ詰番地也 櫻田御門 陸軍参謀本部 司法省
当時普請中 地方裁判所 普請中荘厳也 仙無寺ヘハ不参
近衛師団兵□司令部 海軍省 外務省 霞ヶ関 露国公使
館 貴族院 衆議院 議長宅 山下御門 外堀 鍋島屋敷 芝
愛宕 通信省 農商務省 歌舞伎座 鎧橋 釣橋ニテ鉄橋ナ
リ 水天宮 観世音 同宿帰

◎九日　晴　一月二十三日

前六時三十分 本所発ノ汽車ニテ佐倉行 賃金金四十銭
佐倉停車場ヨリ
宗〔惣〕五宮　一リ半
高津村ト云所也 本社ハ白木造 石牌法名左□
徳満院涼風道閑居士
成田　二リ
不動尊堂□ 境内ノ美ナルハ筆舌尽難シ 参詣終リ下リ
テ 成田町木屋ト尋ヌヘシ 昼飯ヲ食スルニ宜シ 一人前
金五銭ヅツニテ沢山料理ナリ 夫ヨリ佐倉ニ帰リ馬車
ニ乗 賃金八銭ヅツ 后四時三十分佐倉発ノ汽車ニテ
△本所戻賃金前ニ同シ同宿帰

◎十日　晴　一月二十四日

午前八時発
品川　二リ
六郷ニテ多摩川 橋銭八リン
川崎　二リ半
当停車場ヨリ汽車ニ乗 横濱マデ金八銭
△横濱　三リ半
上州屋七郎平泊 二十五銭 弁当入

◎十一日　晴　一月二十五日

前七時発 当市見物 神奈川県庁 地方裁判所 異人家

町家並奇簾ナリ　海岸ニ桟橋ヲ架シ　荷物運搬便利也
能々尋ネ見物スヘシ　午前十時二十二分発ノ汽車ニテ
程ヶ谷　戸塚ヲ経　大船ニ至　賃金十一銭

大船　　四リ

歩行ノ方ハ是ニカカラス　直ニ鎌倉ニ行ク

鎌倉　　一リ

入口ニ円覚寺ト云寺有　上ニ弁才天　大鐘有　朝比奈三郎
ノツキスト云ハ虚説ナルヘシ　案内賃五リン
高九尺　経五尺　厚五寸也　直ニカケヌケ道　次ニ鶴ヶ丘
八幡宮ノ数多シ　皆朱塗ナリ　宝物多シ　見料金十銭ナリ
日清戦争ノ際分捕品沢山アリ　大佛参詣
御丈五丈三寸　頼朝公ノ建立　案内料金一銭　長谷観音堂
大間六間四面　御丈三丈三寸　楠ノ木像ナリ　鎌倉権五郎
塔　手玉石　力石二ツアリ　星月ノ井〔井戸のこと〕力水
アリ　朝比奈切通　江ノ島　街道砂道ナリ

江ノ島　　二リ

三社弁才天　参拝終リテ向ヘ　下リテ海辺ニ橋ヲ架シ　橋
銭ハ一人ニ付一銭ナリ　茲二百二十間ノ穴有　奥ノ院ナ
リ　油代一銭ヅツ至スニ　股ニ成テ火ヲ燈ス　案内ニ従テ
行ク　右ハ岩谷弁才天　左ハ天照大神　参詣終　午后五時
着　岩本楼〔現存の旅館〕泊

△一　金二十八銭　弁当入　岩本□泰

◎十二日

五時半ノ発　この□貝細工ノ名物ナリ　掛直多気ヲ付ベ
シ　多分買ヘカラス　海辺ニ橋有　潮ノ引タル時ハ渉ルハ
ナシ　橋銭ハ一銭五リンヅツ

藤沢へ　　一リ

入口遊行寺　時宗ノ本山也　尋ネミルヘシ　数々普請中ナ
リ　釣燈篭数多シ　金銀ノ細工ニテ結構宜シキ也　我等寄
付金トシテ十銭ヲ納ム　右ニ登リ小栗判官ノ墓所　及臣
下十名ノ碑　照天姫ノ墓　姫ノ墓ニ行タルハ股竹アリヌ
桔梗鏡アリ　案内賃金一銭ヅツ　横山一門ノ墓所　藤沢停
車場ヨリ　午前七時五十八分発ノ汽車ニ乗　豊橋マデノ
賃金一円五十八銭　平塚　大磯　国府津　松田　山北　小山
御殿場　佐野　沼津　鈴川　岩淵　蒲原ヲ経テ　興津下車　コ

ノ間旧箱根ニトンネル七ツ有

△注意　東海道線路ハ遠近ノ割引ナシ　依テ是ハ興津出口ニ清見寺登参スヘシ　三保ノ松原　田子ノ浦ニテ眺望景色宜シキ所ナリ

江尻　一リ

清水町　十丁

コノ出口ニ竜源寺有　前ト同シク風雅宜シ必ス参ベシ古今無双ノ景地ナリ

久能　二リ

△午后六時着　石橋六郎

一　金十七銭　弁当入

◎十三日　一月二十七日

雨天　案内者宿ヲ出ス　久能登山　右両大師左制札　是ヨリ両側ハ石ノ手摺也　十丁程モ登　一ノ御門少シ登　右ノ方勘介井〔井戸〕左物見ノ松　地獄岩上リテ左ノ方　社務所参拝料トシテ金三銭納ム　外□銭ナシノ斯也　上ハ二ノ門銅鳥居　御神馬　太鼓楼　東御門ニ廻　草鞋ヲ脱内ニ入御本社参詣　別格宮　別格官弊社東照宮　普請結構広大美簾ナルハ筆紙ニ尽難シ　後ニ廻リ　案内ニ従ヒ鳥居ヲ少シ上リテ　家康公ノ神廟　五輪塔石ノ高サ一丈五尺　首尾能参詣済　宿屋ニ帰リ

静岡　三リ

静岡県コノ所ニアリ　御城下町也　古家康公ノ居城也　正午十一時二十七分発ノ汽車ニ乗　焼津　藤枝　島田　金谷堀ノ内　掛川　袋井　見付　中泉　濱松　牧□　鷲津　二川ヲ経テ　后四時豊橋着

△駿河屋　安太郎泊

一　金二十二銭　弁当入

△注意　秋葉神社参詣ノ方ハ　掛川マデノ切符取ヘシ香推三尺坊ナラハ　袋井マデ乗方宜シ　何レ通シ切符ハ不便也　次　江島及当宿屋ハ船ヲ進ムト□トモ　必ス乗ヘカラス　賃金安ケレトモ不宜　先掛所多ク残ル也　第一ニ豊川稲荷　熱田明神　名古屋　津島天皇ヌケル也　戻リテ掛ルトイヘトモ　美濃　谷汲行時ハ　津島　名古屋ハ大ニ逆路也　宜シノ推考セラルヘシ

◎十四日　晴　一月二十八日

午前七時 豊橋発ノ汽車ニテ 御油 蒲郡 岡崎 安城 刈谷 大府 大高 熱田 名古屋（乗替）蟹江 前ヶ復 桑名 富田 四日市 河原田 高宮 亀山（乗替）下荘 一新田 津 阿漕 高茶屋 六軒 松坂 徳和 相可 田丸ヲ経テ 后三時 宮川着

賃金一円二十七銭

山田　半リ

外宮参拝 豊受大神宮

宇治　五十丁

コノ間古市 おく山 宇治町続也 泉館大夫 宇治町民也 元ハ宇治橋之向ナレトモ 明治二十三年皇大神宮ノ公園也ト□成宜 茲ニ家屋一軒モナシ 同五時着

△泉館大夫泊

一　金一円五十銭二晩一□也二役ハ二円

◎十五日　一月二十九日

御本社参拝

御神楽　金五円

大神楽　金十円

大々神楽　金二十円

神楽殿ニテ御□□ヲ□ 御神酒頂戴 □リテ泉館ニ返リ 昼飯 天気都合宜シキ時ハ朝熊山参詣スベシ □□ノ御□□□長成太夫丞筆ノ掛物盃ヲ頂戴 其他イナギノ名物也 一場□□シ□忠ト云町至ルニ宜シ

◎十六日　晴　一月三十日

早朝 内宮参詣 本日皇大神宮ノ楽典也 アリテ朝熊山参ノ

朝熊山　七十二丁

御本社ヨリ少々□□ニ 泉館太夫ヨリ詣参ノ弁当ヲ□朝熊虚空□参詣 コノ所万金丹ノ出所也 下町ニテハ求ムベカラズ 当時ハ本社焼失ニ付 建築□寄附トシテ瓦一枚 □銭ニテ納メ

二見　二リ半

△午後三時着 松坂屋新助泊

一　金十八銭 弁当入
コノ所貝細工出所也 気ヲ附テ買ヒウベシ

◎十七日　晴　　一月三十一日
早朝二見参拝 山田ヲ通リ宮川行山田□□也 二見ニテ
早クベ 山田泊リ宜シ
宮川へ　　三リ
田丸へ　　一リ二十丁
コノ所ニ追分有 右ハ高野左ハ熊野
原へ　　一リ
コノ所道引ノ観音□能ノ□所ナリ
□ヶ瀬　　一リ十八丁
出口□引観音有 聖徳太子作□の□ニ添フカ如ク 守□
ニ左手引観音トカ参る
栃原へ　　一リ十八丁
△置島屋惣七泊リ 十七銭 弁当入
午後五時着

◎十八日　晴　　二月一日
午前五時半発
楠村へ　　一リ半
□漆へ　　二リ五丁
野尻へ　　一リ半
コノ出口境原神社有　伊勢大神宮ノ宮造　同所参詣ス
ベシ
阿多へ　　一リ
拍野へ　　一リ
間弓へ　　三リ
長濱へ　　三リ
午後五時半着
△阿らしや長太郎泊 十八銭

◎十九日　晴　　二月二日
金六十銭 是ヨリ三輪崎マデ汽船 □□□ 紀川丸
金二銭船賃 弁当代入 午前十時五分 午後一時三十分出
帆 引元寄港 及ビ尾鷲木之本寄港 翌二十日 午前二時

三輪崎着港 此所 足痛ノ者ハ必ズ船ニ乗ル方宜シ 陸行ヘハ鬼山越トテ難儀ナリ 三輪崎 上陸

陸行ハ二十二リ餘

新宮へ　一リ半

此所行戻リ也 夫ハ□□□テ船ニ乗ルベシ 熊野神社 夜時前ニ付コノ門□ハズ 御門□ヨリ遥拝夫ヨリ三輪崎戻

◎二十日　晴天

三輪崎　一リ半

濱ノ宮　一リ半

此所ニテ 豊阪 中川 岩根□ニ付キ六銭 出口丹補神社 本寺ハ千手観音 此寺ヲ補□□寺ト号 助知ノ麓也 是ニテ御塚□ヲ初ル所之 □ハ□レ 一リ斗行ハ一ノ鳥居ソリ橋有リ 是レヨリ敷□也 御本社マデハ十八丁也 六丁登ナリ 太ヘ行ハ 日本第一ノ□布也様 殿三間□ス 間岩石ヲハ子越御境ノ下ニ達シ 御参向ヲ様ス 一下斗戻リ登リテ 右ハ西国一番札所観音 正面ハ御本社　熊野十二社 堂数五ツ コノトコロニ社務所有リ コノ所ニテ熊野之御館ヲ受ケ 金□銭也 観音ノ御□ハ三銭 御社下 佐藤新兵衛

金二十銭 弁当入

和歌山□□□□市野々村 午后二時着

那知山へ　二リ

◎二十一日　雨天　二月四日

午前六時

小口へ　二リ

此山ヲ大クモ通リト云ヒ 険ソウノ峠也 那智山ヨリ少上リテ 左方妙法山 □之房 大雲通リト云ヒ随分有 雨天ニテ□ハ参ラス 至二□のり 二十五丁登シテ茶屋有リ 上下大難所ナリ 此峠那智山ト小口ノ間ナリ 小口出口ニ小川有 船セン四リンヅツ

湯ノ峯　六十六丁

午后六時着 伊勢屋浅吉泊

金二十一銭五リン 弁当入

一入湯料　上 金三銭 中 一銭五リン 下 六リン

◎二十二日　雨天　二月五日

本宮　二十五丁

熊野神社 元川中ナレトモ 明治二十二年 大洪水ノタメ
水害ニ罹リ 三丁許北之山ニウツシ 拝殿御殿本社三ツ
社務所有リ □行□逆ナレトモ 本宮ニカカリ湯ノ峯ニ
泊ルハ □リナルベシトノ考ニヨリ 雨天ナレハ道二湯
峯□戻テ泊リ

◎二十三日　晴天　二月五日

前五時発

大漆へ　二リ五十丁

野中へ　三リ五十丁

家屋一軒有

近□□　十八丁

家屋有 橋根大坂峠 二夕峠共二古道近シ 次々二十丈峠
大坂峠 左ハ古道行ヘシ

来栖川へ　一リ半

出口新古道別有 古道行ヘシ□見峠ナリ 元ハ家屋アリ
トノコトナレドモ 今ハナシ 暁方ナラハ泊テ吉

三栖へ　三リ

家屋二三有

田辺へ　二リ

午后八時着 京屋八平 金二十銭 弁当入
コノトコロ古城下町ナリ □□□□居城ナリ
モシ足之痛アラハ 和歌山マデ船ニ至のれり

◎二十四日　二月二十八日

手前 六時発

南部へ　二リ

切目へ　二リ

印南へ　半リ

シネ谷へ　二リ半

出口ニ川□ 橋銭八リン 日高川ナリ この辺人力車有
気ヲ付テ乗ルナリ

御坊へ　二丁
原谷へ　二リ
陸□道成寺へ参るナラハ 小松原ヲ通行ヘシ 我ハ不参
少し廻リナリ 午后五時着 原谷港
楠山岩吉 金十八銭 弁当入
コノトコロ原谷ノ入口ナリ 東二向フナラハ観□宿屋
ヲ定メ泊フベシ 原谷ハ七十丁ノ□ナリ

◎二十五日　晴　二月八日
前五時発
コノ間 鹿ヶ瀬峠有 上下五十丁
井関へ　二リ
コノトコロ川有 橋セン五リン
湯浅へ　一リ
コノトコロ坊屋峠 白戸ヶ峠有 下リテ雲雀山 得生寺
中得姫ノ捨テラレタルトコロナリ 次ニ有田川 橋セン
五リンヅツ
宮原へ　一リ半
コノ間 陽坂ニ弘法大師瓜生□地 □寺有 峠茶屋有上下
五十丁
鶴谷へ　一リ半
コノ□蜜相の出□ナリ コノ間藤白峠有 上リ十九丁
下リハ十七丁 峠ニ池有 鯉有 茶屋有 地蔵寺有 □□桜
峠ニ関山ノ石塔 南無阿弥陀仏ト有 コノ山ニ登リテ西
ハ秋□島見ゆる 北ハ和歌山市 紀三井寺 見ルお□□□
景色宜し 少シ下リテ 狩野□□ノ松岡観音□□□□□
松ハ□タリ 次ニ熊野権現一社有
藤白へ　一リ
木綿足袋ノ□キトコロナリ
紀三井寺へ　二十丁
紀三井□ 熊町ナリ 入口ニ大鳥居有登テ 二□川 和歌
ノ浦 目ノ下ニ見ゆル紀三井寺 西国第二番札所ナリ
景色□□□ナリ
和歌ノ浦へ　舟屋　十八丁
舟センハ一銭ナリ 同地着
和歌ノ浦二付上陸至二参□□□所 □□ナリ

和歌山市　一リ
紀州様 五十五万五千石ノ城下也 和歌□応□□有
△午后五時着 浅屋前助泊
一 金十五銭　弁当入

◎二十六日　雨天　二月九日
八軒屋　一リ
是宿二付車二のる
岩□へ　二リ半
コノトコロ二橋有 □□□一銭五リン
長田□へ　二リ
厄除観音有
粉川へ　半リ
西国三番札所 粉川寺 本寺千手観音堂 十五間十六間南向 堂内ニ弘法大師□□の□動寺有 御下町ニハ□□ノ出所ナリ
△余□屋□□□泊リ
一　金十八銭 弁当ナシ □□□一里□

午前十一時ノ着

◎二十七日　晴　二月十日
午前七時発 町中マデ戻リ寺野行少シ行テ 新古屋の別□有 古道宣シ □ヨ□ 我ハ新道行
市場へ　一リ
コノ間川有 舟セン八リン
渋田へ　一リ
志賀へ　一リ
花坂へ　一リ半
コノトコロ二遍熊光院ノ□宿 米屋惣右門方ニテ昼飯
一人ニ付金十銭ヅツ 御酒□□案内者出ツ
矢立へ　八丁
是ヨリ一丁目あ 石ノ丁□者 袈裟掛石 押上石 □石□石
大門へ　五十丁
大門十四間二十五間寺十八間 大門仁王ハ一丈八尺 午后二時半着

遍照光院　　一リ

△位牌ヲ受 是ニテ宿料トス

茶牌ハ 一人前 金二十五銭

夫婦ナレハ二本トス

日牌ハ 一人前 金五十銭

大月牌ハ 一人前 七十五銭

小日牌ハ 一人前 一円二十五銭

◎二十八日　□至　二月十一日

奥ノ院へ　十八丁

案内ヲ□ 一の橋ヨリ中三四丁ノ間 内宮□大名ノ石塔

□□し □川 □橋 弘法大師 姿見ノ井 中ノ橋ヲ渡テ

御廟 カサ地蔵寺 遊熊光院ヨリ先祖代々板札ヲ花ニ□

御新橋 骨堂 □堂 是之寺 □□ 奥ノ院 参詣シ 同院ニ

戻リ □□ 午后ヨリ 七堂 伽藍へ 西行様 薬師堂大堂ミ

テ 中々奇可簾ナルハ□□□□シ金堂 大堂 経堂 大

日如来 大サ二丈余 五本也 経堂八角堂ニシテ 廻リ堂

其他□堂多シ 案内者ニ尋ネベシ 金側院ハ天子ノ寺也

是レヲ拝□ 夫ヨリ同院ニ□ル所萱堂

◎二十九日　晴　二月十二日

紙谷へ　五十丁　一リ

河根へ　一リ

学文路へ　一リ

三新茶屋へ　一リ

紀ノ川 橋銭三リン

橋本へ　一リ

待乳へ　一リ

此寺待乳峠和歌山奈良県境ナリ待乳□□買フベカラズ

五条へ　一リ

白木綿ノ出所也

宇野へ　一リ

河田へ　一リ

此所山芋の名物ナリ

藤屋清四郎 泊 十八銭 休憩よろし

◎三十日　雪天　二月十三日

下関へ　一リ

之□□所□坂ニ参ル人ハ足□行也□□参

吉野へ　二リ半

官幣 吉野大社也 入口ニ有 後醍醐亭ノ朝廷也 今ハ衰微ニ及ビ 見□ナシト云ヘ共 此春之桜町ナラバ随分宜シカルベシ 一面ニ桜木ナリ 一望ニ子本ノセウアリ

案内料 一人ニ付 金三リン

大峯山ニ登ル関門ニシテ □ノ発心門□□寺 二丈五尺凡一丈二尺 聖武□ノ建立□□佛心門トアルハ弘法大師ノ真□ 少シ登シテ□□権現ハ□ 義経公及ビ楠木正成公ノ□跡有 町ハ思ノ外ニ賑ナリ

上市　一リ

町ヅレ 妹山背山ヲ大ニ見テ通ルナリ 未ダ町家通リ過ザル内ニ 左ニ細道ヲ登ル

□□へ　二リ

多武ノ峰　一リ半

鎌足公ノ御廟ナリ 官幣社也 十三階堂有 随分山坂ニテ難渋ナリ

岡寺へ　五十丁

西国第七番札所ナリ

瑠璃ノ井 弘法大師の足跡□

橘寺へ　二十丁

聖徳太子誕生シ地

橿原へ　一リ

是ハ神武天皇 日向国ヨリ大和国ニ入リ □□の当地□即位セシ所ナリ□□□□ 勅命ニ依て□社ヲ作ル 橿原神社 官幣大社ナリ 京都御所ヨリ遷セシ由 白細工ニテ大社ナリ 境内慶シ 夫ヨリ神武天皇陵へかけぬけあり

神武天皇御陵　二十丁

△御陵前 福本や三□泊ナリ

午后五時半着 二十銭 弁当入

正月元日

◎二月十四日

前六時半発　御陵参詣　神武天皇ノ御墓や御柩ハ切石也
塚ヲ連慶土や浄二丈八尺幅五間　周リ三間　二十四間
至極の廻四間　七十一間　御陵ノ上ニ植タル松ハ　今上天
皇　七十五円ニテ□能松ナリ　□の外ヨリ遥拝□んや
コノトコロニ神功皇后ノ古跡なり　日和宜しき時なら
では参詣□ハ　□□□参是ヨリ□番札所　初瀬行　□足痺
ニ付ふ参　汽車ニ□ふテ奈良ニマデ行　八番へハ必行ス
ベシ　□傍停車場ヨリ奈良マデ

一　金二十三銭　汽車□□　私設鉄道割引アリ

前十一時奈良着

猿沢池側かまや喜八ニ荷物ヲ置　弁当を貰ヒ　名所古跡
参詣　猿沢池　水七分魚三分　編掛　抑人皇三十九代天子
妾委□庶なりとて　柳ニ編ヲ掛コノ地ニ身ヲ□タリ　帝
王是ヲ哀ミ　番ヲ神ニ□□　□神社之ナリ　堂ハ□夜ニ□
向せりと云　□□堂ハ□ニなり　池□早雨ニ□少さし
大御堂□背向ノ古跡□□　三本松　根□奥ノ院也　石灯籠
金灯籠数多し　□□六参シ　一夜ニ灯スト云フ　□宮　三
月堂　春日四社　二月堂　四月堂

三竺山この所□□屋数多し　買ふべからず　角細工数買
ふ屋あれば□□也　東大寺　□向ハ□宮　念佛堂　釣鐘日
本四ノ内

□一丈三尺六寸
口九尺一寸三分
厚八寸三分
重四方八□九斤□□

大佛殿　三十間四面　□□金二銭ヅツ
本堂金□ルシヤナ佛〔廬舎那仏〕御丈　五丈三尺五寸
眼三尺　鼻　経一尺　廻三尺　耳八尺　御昭□　□□痛　観世
音　虚□堂　菩薩　東金堂　衣ノ松　南堂　西国九番ノ札所
也　堂ハ角　五重堂塔

△この地名所旧跡多し　枚挙ニ遑〔いとま〕アラズ
□ニ□る

一　金二十三銭　弁当入

□一銭　案内料　三人分

◎二日　二月十五日

前七時発 晴天

法花寺　十八丁

西大寺　十二丁

菅原　十二丁

菅原道真公 ご誕生シ処

招提寺　十五丁

コノ間ニ垂仁天皇ノ御陵有

西ノ京　十二丁

三体ノ薬師如来ヲ安置ス 仏像ハ金ナリ 堂ハメノウ〔瑪瑙〕石也 五重塔有

△法花寺ヨリ是マデノ間 古ハ見るなりと思はる

当時ハ土破〔土破石〕ニ及ビ 見事ナリ 除テ□□□し

郡山へ　十丁

松平甲斐守 十二万石ノ城□也

小泉村へ　一リ半

法隆寺へ　一リ

聖徳太子 七堂伽藍なり 寺院坊舎数多し 必参詣至シベシ 七重塔有 境内慶し

竜田へ　十八丁

コノ出口 官幣社 竜田神社

国分へ　二リ

雄略天皇ノ御陵

道明寺へ　二十五丁

天満宮有 西国第□番札所ナリ参□ 千手クワン〔観〕音　七間堂 五間四面 南向当門前□□や□□□

△午后三時半着

弁当入

一　金二十銭

◎三日　晴天　二月十六日

午前七時発

堺へ　三リ

遍照光院用達□ニ至リ 無料ニテ市内案内ス □続写天満宮 小西行長 朝鮮国ヨリ□参リ 極□□有 妙福寺 大

□□ コノ裏門ヨリ出ツキ当リニテ 金物 ハ是ニテ求ム
ベシ 北村商舗 浪花屋之松 官幣大社 住吉神社 □□□
□有御神馬有 大□不□□毎し 是ヨリ大坂マデ キシャ
〔汽車〕ニノル 賃金四銭 コノ間ニ天下□也有
大坂へ　　二リ
△午后□時着 道□坂 日本橋 京徳松屋与 三橋 三十
銭 弁当ナシ

◎四日　晴天　二月十七日
無料ニテ案内セシム 市内 天王寺七堂伽藍 □□神社
□簾橋 旧城鎮台 四ツ橋 鴻ノ池長者 府庁 儀〔議〕事
堂 午后三時 大坂□船屋□船式 □川丸□□五時出帆
賃金二十五銭 多度津マデ

◎五日　晴　二月十八日
前四時着 多度津 船賃金三銭也 □□害ニテ朝□
一 金十一銭 一 飯料
多度津　　海上　三十七里

琴平町　　五十丁　三リ
金毘羅神社　　登八丁
御守籠ハ入口ニテ松ベカラズ 御本社下マテ松屋□□
□ 鳥居ヨリ奥ノ院マデ之間 不販不之 夫□石燈籠 寄
附金ノ名附不□山ナリ 奥ノ院ニモ社務所ノ出張有 是
ニテ御守ヲ受ケ 御本社ニ行 金ノ御幣ニテ祈祷ヲ受ケ
法堂額多し 御本社白細工 □大社ナリ
多度津へ戻　　三リ
□□□□一泊 金三十銭
午后二時□ハ□成田ノ口出船□き□付 □を行ば宿泊

◎六日　風　二月十九日
田ノ口へ　　海上七里
船賃三十三銭
コノトコロニ □屋現金ニテ船宿ニ□ 大ニ□□の□ナ
リ 宜しく住□□□□
△午后五時半着 大黒物右門泊
一 金二十一銭 弁当入

◎七日　朝雪　二月二十日

瑜珈〔由加〕山　上リ一リ

由加神社大社也 □金の馬有 □金の□寺殿有 是マデノ間 小□□□地ノ□□ナリ 三丁斗リ手前着

山屋藤五郎ト云ハ正札鮒之

尾原へ　十八丁

天城へ　一リ

茶屋町へ　一リ半

早□へ　一リ

備中吉備津へ　二リ

吉備津神社 官幣大社也 入口□金続□□有 廊下二百間金也 鳴釜あり 鳴動するハ浄キ由緒アリ

備前吉備津神社へ　十八丁

入口池有 弁天大ナる 石燈籠アリ津殿也 日清交戦 □□衛砲撃ノトキ 清兵発砲□尋艦ニ□□したる大砲 九五十六□目ありと同船

岡山市へ　二リ

△午后五時着 津山屋伊三郎泊

一 金二十銭 弁当入

時間あれば公園地〔後楽園〕ヲ見物すべし

◎八日　朝雪　二月二十一日

前八時出発 古城 七重□ 岡山県 □見物 公園地日本一ナリ 公園地ニハ物産陳列場 □会議場 近マデハ□□□あ□五十三次ノ□を□リ 四羽□□よ□し

藤井　二リ

コノ出口 長□停車場ヨリ 午后一時二十分発ノ汽車ニテ 瀬戸和気吉永三□上郡有 傘那波□続テ 龍野至ニ賃金一 人前四十八銭 三石上□の間ニ十八丁余のトンナル有 日本一奥龍野マテ

龍野マテ　十三リ半

正条へ　八丁

鵤へ　五十丁

聖徳太子□□の像 七堂伽藍三階塔 本日ハ御縁日ニテ祭礼ナリ □ヨリ書写山へ 近道着行て 吉掛のけ道ナリ

午后四時半着 □□太郎泊

一　金十七銭　弁当入　少□ナリ

◎九日　晴　二月二十二日

午前七時半発

西坂本へ　三リ

書写山へ　登リ十八丁

西国第二十七番ノ札所ナリ 西国札所第□番ノ社ナリ

本堂ハ掛造ナリ 五丁斗行ハ□□□あり 左ニ下りて奥

ノ院ナリ 大堂石垣高くあれ□ 当今ハ大破二及び寺院

坊舎ノ跡□□し

西坂元へ　下リ十八丁

姫路へ　一リ

旧□井□楽□十五間 右の城下ナリ 左城甚□有 第四大

阪飾□の□□ 右革細工ノ名物ナリ 坂屋卯七郎□ニテ

買べし

御着　一リ

豆崎　一リ

出口マデ□有 □□□右ハ□砂

曽根　半里

曽根天満宮 □□□御□□の極石の□□□□リ橋あり

石ノ宝殿　半里

本社□ニ 三間四方ノ浮石有 かの□□□ト大□正□ト

ノ御□のよし

高砂へ　一リ

△午后七時着 □田や惣兵衛泊

一　金十八銭 弁当入

休裁宜し

◎十日　晴　二月二十三日

前七時発 □の松 □□名所有

尾ノ上　十八丁

住吉社□□□の名所 尾ノ上□ □□□□ノ□

濱ノ宮天満宮　八丁

別府　十八丁

住吉社手なくら□

長池　二リ

大久保　一リ
明石　一リ十八丁
城下町也 松平左兵衛□ハ□右や□□人
大念谷　十八丁
□□　二十五丁
白瀧　一リ
一ノ谷□盛ノ墓有
須磨　一リ
すま寺 □盛ノ宝物有
△午后五時着 新屋竹次郎泊
一 金十六銭 弁当入

◎十一日　雨天　二月二十四日
午前六時発
兵庫　一リ半
兵庫□□堂ニ有 日本第二ノ大佛あり 平清盛ノ墓
神戸　十丁
コノ所□川ニテ□ナリ 町続ニテ□所ナリ □□ハ舩舶
橋を並べ□ル □□□□□し 湊川神社楠公の御墓
西ノ宮　五リ
コノ入口ニ 第四番札所中山寺ニ行道あり □木堂ニ入
小川有 舟銭五リン 西ノ宮ニ官幣大社 蛭子神社 必ス
参詣□スベし 中山ニ行堂ノ廻也
中山　三リ
中山寺 西国第二十四番ノ札所ナリ 本寺ハ子授観音堂
七間五間辰直向□□□ニ宜し 下ニ宿屋多し 暁方ナラ
バ是ニ泊ルベし
池田へ　一リ十四丁
五時半着 酒□名産也 酒造屋多し
△金二十三銭 弁当 久代屋惣七 □裁ナリ

◎十二日　曇　二月二十五日
七時発
平尾　一リ
箕面山　十丁
弁才天 如意輪観音 □□ コノ所ニ水車 □□の瀧□場

有 弁才天 □□□道を勝尾寺マデ山中ノ川ニ沿テ登ル

同瀧〔箕面の瀧〕　二十丁

勝尾寺　一リ

西国第二十三番札所也 本寺ハ千手観音 長八尺 堂五□

四面南向

郡山　一リ半

□□ニ□□有

総持寺　一リ

西国第二十三〔二十二〕番ノ札所也 本寺十一面観音

堂　五間四面南向

冨田　十五丁

□□　一リ

是ヨリ山崎マデ汽車ニ乗 金五銭

山崎　二リ

男山　三十丁

コノトコロニ川有 淀川舟セン 五リン 上ニ登リ橋本宿

屋二三□有 是ヨリ御本社二十丁 □□ナリ 石清水八幡

宮 官幣大社日本第一ノ大社也 廊下六間二十四間四面

廻リナリ □金の□有 七十三間□一尺五寸 内拝料 一

人ニ付金一銭□□□リ 奥ノ院三坪彫物ハ 左リ甚五郎

□ 右ハ□リ□内□称□ニ□リ 正面ハ応神天皇 右ハ神

功皇后 左ハ姫〔比咩〕大神 境内□し 必参詣するべし

五丁斗下リテ 八幡宮町ナリ 少し行て 木津川 橋セン

五リン

淀へ　一リ

△午后六時半 丸や清□□

一　金二十銭 弁当入

◎十三日　晴天　二月二十六日

六時発

伏見　一リ

六地蔵　半リ

宇治萬福寺ト云寺有 境内慶寺院坊舎ノ□□□□れ□

普請□□なし

三宝堂　一リ

西国第十一番ノ札所ナリ 上醍醐□退山越近道有

上醍醐　　二リ

西国十一番ノ札所也 堂九間四面南向や 源義経公の建立 女人□□の御山や禁女人堂有 五堂塔有 外堂塔□舎□し

京都へ　　二リ

△三条大橋 参詣 □□屋藤五郎

一 金三十銭 弁当入

見物の都合宜しき所ハ もちや又八扇やよろし

◎十四日　晴　　二月二十七日

市内見物 案内人を頼 賃金八十五銭ヲ与ふ 博覧会場 大極堂 桓武天皇 普請結構 人目を驚カス□□□□□述□□年 □□前成□□□ 聖護院 拝見料金二銭 除キテ宜し 黒谷 熊谷鎧掛松 扇松 □盛墓 熊谷墓 勢至堂 法然廟 南禅寺 禅宗本山 疏水 小路山上ニ舟登リ 栗田御殿 □□料□銭五リン 天皇陛下御照□所なし 親鸞□上人出家得度ノ□ 知恩院 見料金二銭 堂二十八間四面 三代将軍秀忠公の建立二造ノ□ 左甚五郎忘れ置し傘 東方の拝ニなり □の畳の数ハ五千八百畳□ 廊下上ニ大□□寺 一丈八寸 口経九尺 □□九寸五分 祇園 官幣社 八坂神社 五重塔 清水寺 西国第十六番ノ札所也 堂九間四面南向 本寺 千手観音 御丈八尺 音羽滝あり 六波羅寺ハ十七番札所也 本寺十一面観音堂八間 四面東向 三十三間堂 大仏 寄附金一銭 大□□一丈五寸□九寸□九尺五寸 豊国神社 耳塚 東本願寺 昨年四月□成大寺ナリ 普請の□□□□ナリ 金銀をチリバメ奇簾□□□□□ 阿弥陀堂 □□水ナリ 西本願寺 六角堂 西国十八番札所ナリ 堂南向東寺如意輪観音 御所 北野天満宮 第十九番 革道 小景 第十五番 今熊野 小景 午后七時発 汽車ニテ伏見山科ヲ経テ 大津ニ至ニ 賃金八銭

大津　　三リ

△滋賀県ノアル所ナリ 町並四丁

えびや弥五郎泊 金二十五銭

◎十五日　二月二十八日

三井寺 西国第十四番 札所ナリ 参る如意輪観音 御丈

五尺二寸 堂十六間四面東向 近江八景ノ□シテ琵琶ノ湖を眺望するニ風景宜し 東方ニ下リ五十丁 上リ奥ノ院ナリ 弁□の□□□三階塔 □□徳堂多し

石山　二リ半

コノ所 宿屋ニ荷物を置 参詣スベし 石山マデ十丁金を□べし 西国十三番札所也 参るハ如意輪観音 御丈一尺六尺堂八間四面南向 二階堂あり 近江八景ノ□シテ石山ノ秋月ト称ス 境内宜しき處也 コノ処ニ□宮ヨリ上りし□有 参詣□て又□□る

漆田へ　八丁

漆田ノ橋あり 舟ニのるべし

草津へ　二リ

コノ処参宮道 中仙道ノ追分ナリ

守山　一リ半

三十一番札所へ参らんとナリハ コノ処ヨリ舟ニ□ふべし 若□田ヨリ小蒸気船あらバ 是ニ宮□至極宜し □□ヨリと船あるべし 陸行する時ハ 八幡ニ掛リ 長命寺へ一リ半ノ行戻リ也 宜しく注意すべし 三十番ノ竹生島□参ニハ 瀬田ヨリ宮□宜し 海上よけれハ長浜ヨリ□□ハ近し コノ間ニ仁保ト云トコロニ宿屋二軒あり

八幡へ　三リ

△午后七時半着 曽我正三郎□泊

一 金二十五銭 弁当入 小休ナリ

◎十六日　風吹　二月二十九日

午前八時発

長命寺　一リ半

西国三十一番札所ナリ 堂南向七間四面 八幡ヨリ一リ半行戻也 遠し景色宜し所也

八幡へ戻リ　一リ半

コノトコロ少し行テ近□有 浄楽寺ヨリ尋ねて行返し□ニ薬師堂

観音寺　二リ

西国三十三番ノ札所也 近年龍□ト見ユ□寺 千手観音堂 五間四面南向至 □□ぬけ下りて仲仙道ニ出ル

市川　一リ

玄宮　二リ五丁
△午后五時四十分着
一　金十八銭 弁当入 木屋□五郎泊

◎十七日　朝雪　三月一日
午前六時発
彦根　一リ
井伊柿行三十三万石城下ナリ 午前八時十六分発ノ汽車ニて 前原□□ 実原ヲ経テ垂井ニ至ル 賃二十銭
垂井　八リ
赤坂　一リ半
池野　二リ半
□□ 船銭四リン　二リ
谷汲　二リ
西国三十三番ノ札所也 本寺十一面観世音 御丈七尺
堂五間四面南向
善光寺へ　七十二リ
そゑ　二リ半

△午后六時着 コノトコロニ宿屋一軒あり
一　金十七銭 弁当入 九屋桂□

◎十八日　大雪　三月二日
午前八時発
北方　橋セン四リン　一リ
尻毛　一リ
岐阜　一リ
入口長良川 橋セン四リン 岐阜県ノ□所なし 午后一時発ノ汽車ニテ 木曽川一ノ宮ヲ□清州〔須〕ニ至 賃金十四銭 津島ニ□ニ □□□□行□雀順□を仲仙道至行すべし
清州〔須〕　五リ
甚目寺　二十丁
津島　二リ半
△午后五時着 間野や大助泊
一　金二十二銭 弁当入
津島神社 須佐□□□大社也 末社多し 皆朱□□し

◎十九日　晴　三月三日
午前八時発
木田　二リ
甚目寺　一リ
名古屋　二リ
尾張□□ 六十一万九千石御城下也 三□付 次キ□会ノ
地之なら物□□細工ノ庵なり □□□□□第三□□泊
城金のシャツ□有
勝川　一リ半
△午后三時半着 雨天ノタメ
一 金□銭 弁当入 米屋□□門泊

◎二十日　晴　三月四日
鳥居松　一リ半
坂下　一リ半
内津　一リ
コノトコロ 美濃尾張の国境ナリ
池田　一リ半
多治見　半リ
尾張焼 瀬戸物の□□之
土岐津　セト物有　二リ
釜戸　一リ
仲仙道名古屋ノ追分之
△后五時着 伊勢や文右門泊
一 金十八銭 弁当入

◎二十一日　雪　三月五日
前六時発
竹□　一リ三十丁
大井　二リ
中津川　二リ二十四丁
出口分シ道有 新道遠し古道行べし 少し上テ□坂党的
行□の□□有 名物
落合　一リ四丁
馬籠　一リ五丁
妻籠　□□ナリ　二リ

見当野〔三留野〕　一リ九丁
△午后五時着 宿屋澤山□
一 金十八銭 弁当入
伊奈や半□□泊
各町□休泊所多シ飯食□なし

◎二十二日　雪　三月六日
午前六時発
野尻　二リ十二丁
須原へ　一リ十八丁
立町　一リ二十四丁
小野□有
寝覚　三十五丁
浦島太郎の古跡有 名物そば 見料五リンヅツ
上ヶ松　十二丁
□□　一リ
□□や
命をつなぐ葛かげら
芭蕉□□□
川中ニ男岩 女岩あり
福島　二リ半
宮越　一リ二十九丁
△午后五時四十分着
一 金十八銭 弁当入 若松屋喜□

◎二十三日　晴　三月七日
前五時半発
藪原　一リ三十丁
櫛ノ出処ナリ 鳥居絵なし
奈良井　一リ十三丁
贄川　一リ三十丁
本山　二リ
洗馬　二十四丁
郷原　一リ二十四丁
村井　一リ二十八丁
本山ヨリ□□ニ□テ 馬車ヲ進ム松本マデト約ス 宿屋

の□サルトキハ　十余丁モ手前ニ松本□有　是ニテ松本
ナリト云下車セシム　□ミ注意して泊るべし
松本　二十五丁
△三ノ□や□□泊
一　金二十二銭　弁当入

◎二十四日　晴　三月八日
岡田　一リ十二丁
刈屋原峠道　銭八リンヅツ
刈屋原　一リ二十四丁
会田　一リ七丁
青柳　三リ
麻績　一リ四丁
コノアイダ□場峠有　名物柏餅有
桑原　二リ三十丁
稲荷山　二十四丁
△丸や八左門泊
一　金二十銭　弁当入

◎二十五日　晴　三月九日
七時発
篠ノ井　一リ
丹波島　二リ
長野市　一リ
前九時半着　山や　□□
一　金八銭　昼飯料
善光寺参詣　宿やヨリ案内者出ツ　草履貸香料トシテ二銭出ス　大歓進ニ於テ　祈祷守札ヲ受ル所之　堂内参拝内□廻リトモ志トシテ　吾ハ五銭出ス　十銭□ムレハ受領証ヲ授与ス　本堂二階□屋根二重□有　午前六時十二時ト御□□也　何人ニテモ金二十五銭之　午后三時十分発ノ汽車ニ□　篠ノ井　屋代　坂城　上田　田中　小諸　御代田ヲ経テ　午后六時着　軽井沢着　賃金六十銭
△一　金二十七銭　弁当入　油屋旅□

◎二十六日　晴　三月十日
午前六時二十分発ノ汽車ニテ　松井田　磯部　安中　飯塚

高崎ヲ経テ 前橋ニ至ル 是ニ□□□賃金四十二銭 前橋ヨリ大間々マデ十八銭汽車賃 大間々マデ景宜シト□□レトモ 前橋ヨリ下テ足尾通□□のよし

大間々ヨリ花輪　二リ
神戸　一リ二十丁

△午后五時半着 金子雄三郎 泊

一 金二十五銭 弁当入

◎二十七日　雪　三月十一日

沢入　二リ
足尾　二リ二十丁

町ハズレ右の橋を渡り 次ニ又橋ヲ渡り□を右ニ登ル 登山急険ニして一リ半行 峠ニ茶屋有 下ル十一リ半ニして 足尾銅山運送蒸機場有 夫ヨリ□□ヲ下リ 別当ニ

古峯神社　三リ
一ノ鳥居　一リ十丁
□□　三十丁
小来川　一リ半
日光町　二リ半

△□□屋吉松泊リ

一　金二十五銭　弁当入

◎二十八日　雪　三月十二日

別格官幣社東照宮 家康公廟 普請ノ結構堂社 金銀のチリバメ 人目ヲ驚カスバカリ □中々筆紙舌頭ノ及ブ所ニアラスト□ 大略左ニ記ス コノ入口ニ拝観□取扱所有 コノ所ニテ 拝見料 悉知佛区〔ガイドブックか〕価金差別ハ□し如シ

特別上等　金　一円二十銭
上等　金　六十八銭出し
中等　金　三十八銭出し
下等　金　二十八銭出し
平参　金　七銭

蛇橋 笈掛石 満願寺 三仏堂 三仏堂 当山第一ノ大堂之表□十八間□十四間 銅華総朱塗ニシテ 金貝ハ滅金也 本寺千手観音寺 観音阿弥陀仏ノ三大□像ヲ安置ス 左

方ニ□□立内□拝　神々□□料トシテ金一銭ヅツ□ス
後廻テ　相輪堂天海僧正叡山ニ比シ　博教大師ノ銘文ヲ
ウツシ建立之銅柱也　高四丈四尺　コノ口直径三尺一寸
上部釜ノ楼閣二十七連ト金鈴二十四ヶヲ装飾ス　滅金
金貝ノ下　葵ノ金紋ヲ附ス　塗柱四本　同ク銅製　高一丈
七尺堂の左右ニ唐銅燈炉二ツ対立ス　高二丈長崎町人
献納　是斗之金ハ諸大名方ノ御寄進ナリ　石鳥居　表門
前ニアリ　御影石ニシテ　高二丈八尺六寸　柱ノ経五尺五
寸　黒田筑前守長政　本国筑前ヨリ遥ニ南海ヲ運搬シ献
スル所也　東照大権現ノ額ハ　後水尾天皇ノ宸翰石燈炉
二ツ　有馬中務太輔ノ献納　表門ノ左右ハ　酒井讃岐守
献納　五重塔　石ノ鳥居ノ西ニ有　総高サ十七間　三尺塔
内三間　四方桂金欄巻　外部ハ手先ニ至ルマデ総彩色な
□□の上ニ　十二□ノ彫物有　本寺ハ五智如来及ヒ須弥
ノ四天ヲ安置セリ　慶守年間酒侍従忠勝ノ献築　表門　石
之鳥居ノ正面ニ当ル　前面四間横ニ間　銅□総朱塗極彩
色之門之左右ニ　金ノ獅子ヲ置　是ヨリ以内ハ敷石ニシ
テ　陽明門ニ至ルマテノ門　左右ハ丸ノ小石ヲ敷　土塊ヲ
見ス　三神庫　番所厩　御手洗水盤　唐銅鳥居　高二丈　徐笠
木ノ表裏ニ金紋ヲ附ス　三代将軍ノ献寄之　輪蔵　南蛮鉄
燈篭　政宗公ノ献納　高八尺　飛越獅子　朝鮮　献備鐘　同国
献備鐘　阿蘭陀　献備燈　琉球　献備燈　鐘楼　鼓楼　本地蔵
三州峯薬師　陽明門　日墓門ト云　四方唐破風　乗木ハ二
重乗木　正面ノ額ハ　後陽成天皇ノ宸翰　金ノ雲籠桐ニ鳳
凰ノ彫物　龍馬ノ彫物　牡丹ニ金獅子彫物　回廊　神輿舎
陽明門ノ西ニ有　神楽殿　陽明門ノ東ニアリ　社務所　唐
門　陽明門ノ正面ニ当ル　四方唐破風造　白細工梅菊牡丹
杵殿　南向　本殿　坂下門　眠猫彫物有　奥ノ院ニ入ル之
二荒山神社　国幣中社之　二ツ堂　下足代一銭出し　二王
門　二天門　大猷院ノ額ハ後光明天皇ノ宸翰　三代将軍家
光公ノ廟所　夜叉門　唐門　拝殿　本殿　皇嘉門　奥ノ院参拝
終テ　宿屋ニ帰リ　午后二時二十分発ノ汽車ニテ　花巻マ
デ賃金二円二十五銭　日光　今市　文狭　鹿沼　砥上　宇都
宮マデニテ下車　同市見物　后六時発車ニテ　吉田　長久
保　矢板　西那須野　黒磯　黒田原　豊原　白河　矢吹　須賀川
郡山　本宮　二本松　松川　福島　桑折　越河　白石　大河原　槻

木岩沼 増田 長町 仙台ニ下車ニ十九リ 同市一泊

翌二月朔午前八時発車ニテ 岩切 利府 松島 鹿島台 小牛田 瀬峰 新田 石越 花泉 一ノ関 前澤 水澤 黒沢尻ヲ続テ 正午十二時 花巻着 一同相揃 無異帰宅致候也

明治二十九年 陰暦 三月一日

発願　小原弥三郎
　　菅原留五郎
　　小原　亀治
同　喜兵衛
　　渡辺平重郎
同　冨蔵
　　清水勘之助
同　長助
同　□□□
　　菅原　豊治

〆拾人

岩手県平氏
　　菅原　豊治

〔凡　例〕

・改行や文字間のスペースは、読み易さを念頭に筆者が改めた。
・当て字、旧字体、仮名については、原則として原文のまま翻刻し、推定される表記を適宜〔　〕内に付した。
・誤記の可能性または語句の説明を要する部分には〔　〕内に付した。
・判読不明な文字は、その字数分を□で表記した。

（翻刻者　谷釜尋徳）